
魔王の側近は今日も行く

藍色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の側近は今日も行く

【Nコード】

N8644D

【作者名】

藍色

【あらすじ】

面倒臭がりの側近は、夜逃げした魔王様を捜しに異世界へ。そこにいたのは極悪最悪の救世主、その他もろもろ変人ばかり。まあ、とりあえずのんびり行こう。

第零話 証言者は語る（前書き）

まあ息抜きに読んでみてください。肩のこらない小説目指して脊髄反射で頑張ります。

第零話 証言者は語る

むかしむかし、などではなくてわりと結構つい最近。

とある世界のとある王国に、救世主が召喚されたそうだ。

救世主はこことは違う世界　つまり異世界の住人で、前の世界では単位も危うい平民だったくせには、なぜかこれまたとんでもない力を持っていたらしい。

最初は元のいた場所に帰せと国王をどつき、神子の胸倉掴んで脅しまくった救世主。しかし国王が金品をチラつかせれば、

「世界を救うのは私の務め。なぜ拒む理由がありません」

それはまた、手のひらを返したような態度であった、と姫は証言している。

3

さてまあ、人格はともかくその力は絶大だったその救世主。

国を襲う魔物をぶった切り、道すがら邪魔する魔物を踏み潰し、金品強奪のため魔物を刈り上げる救世主。

その姿は神か悪魔か。

悪魔に違いないと連れの賢者は証言していたけれど、まあそんなこんなで順調に、悪の元凶、魔王城へと到着したそう。

ばっさり、ばっさり。幹部なんてなんのその。魔王城の死四天王なんていないかのごとくあっけなく蹴散らし、通過して、さあいよいよ魔王様とご対面。

そして運命は対峙する。

最後まで結局面倒臭くて動かなかった魔王様はこう言った。

「ふ、よく来たな。今までの貴様の功績、もとい悪行は余の耳まで届いている。どうだ、余と世界を半分に」

「そろそろ帰らんと単位がマジ危ないんじゃない、あああああああああ！」

それはもう慈悲なんてあったもんじゃない、と連れの武道家は証言した。

あつさりばつさり魔王を倒した救世主。

役目を果たし元の世界に帰るとき、連れの神子も姫様も賢者も武道家も皆、涙したらしい。もちろん嬉し涙であったことは言うまでもない。ああ、やっとこの世界にも平和が戻る。

これで世界はハッピーエンド。さてはて物語もこれで終わりなどではなくて、やっぱり続きはあるのです。

あつさりばつさりやられた魔王様。そりゃあもう面目なんてあったもんじゃない。

つか、あいついらなくねえ？　みたいな空気になるのも止む無し。

ああ、可哀相な魔王様。無情にも家来は魔王様を肩書きだけはそのまま、遠くの部署へと追いやった。

所謂、左遷。

「ほ、本気を出せば一発だったんだ！」

涙ながらに語る魔王様。でも、誰も聞いちゃいない。けれどそこはさすが邪悪な魔王様。城からありったけの財宝、秘宝、魔具を持ち出し、逃げ出した。

置手紙には、

「救世主を倒し、ぎゃふんと言わせてやる。捜さなくてもいい。心配はいらない。三時のオヤツまでには戻る。本当に捜さなくていいから。でも捜すときは戸締りだけはしっかりしといてね」と、殊更に捜して欲しいことをアピール。

そして、困ったのは勿論魔王城の側近たち。

おいおい、どうする。財政難だ！

魔王様は魔界中に指名手配。

行き先はもちろんばっちり把握しているさあ。救世主のいた世界に違いない。だって、手紙に書いてあるもん。だけど、どうする？絶対魔王はやられているぜ。なんていったってあの、救世主だ。魔王が持っていた金品は確実に略奪しているに違いない。

困り困った魔界の宰相、重役、おじいちゃん。そして、選ばれた選択肢。

なんとか穩便に返してもらおう。菓子折りつきで。そして交渉人という名の人身御供は出来上がった。

「超、面倒臭い」

そんな側近はやる気なし。

第零話 証言者は語る（後書き）

ぼちぼち書いていく予定です。お気に召したら、どづんどづづ。
もう一回。

第一話 魔王は逃亡中

「やあ、お嬢」

「……………え？」

へい、と片手を上げて見せればお嬢　　もとい、魔王様は阿呆面。
こいつに様とか付けたくないけどね。

「な、何でここに！　　というか、そんな、さ、さ、捜さなくていい
って言ったのに！　　もう、そんなに余のことが心配だったか！？
ま、まあここまで来たんだ。そう熱心に頼み込まれては帰るのもや
ぶさかでは　　」

「金返して」

「……………」

「……………逃げるな」

回れ右して全力ダッシュを試みるお嬢の襟首を掴み引き戻す。ぐ
えっ、とか鶏を絞め殺したような呻きが聞こえたが、もちろん無視。
そのまま宙に投げ飛ばす。

お嬢は宙に飛びながら三回転。ちゃんとスカートは抑えてから手
を伸ばし、着地。

十点、とか言いやがったときには殺そうかとも思ったが、そこは
不動の理性で我慢した。

「貴様、仮にも魔王になんてことを！」

「指名手配犯がいばるな」

ぺら、と懷から指名手配書を出す。

国庫窃盗罪、元魔王エローラ「ロベス。5215万ヘルの賞金首。

「な、な、な」

「俺もこんな魔力の薄くて息苦しいところ来たくないのに、駆り出されちゃって。ほら、わかつたらさっさと返して。そしたら別に、命はいらないから」

愕然とした顔のお嬢。そりゃあ、子供のいたずら程度のつもりだったかもしれないが、その地位と奪われた額からして冗談にもなりはしない。それくらい分別はあったと思っていたのだが。

残念ながら気の毒だとは思わない。それでも後悔の念はあろうと言葉を待てば

「元ってなんだあああああああ！」

超後悔。

「余は、余はまだ魔王だぞ！　そ、それなのに、元って！」

「だって、お嬢。あんた北の外れに飛ばされてたじゃん。確か、ボケた老將軍と倉庫内整理だっけ」

「ボケた老將軍ではない！　グランおじいちゃんだ！　それに、貴重な書類が一杯なんだぞ、あそこにあったのは！　魔王様にしかできない仕事だと、あのハルトも」

「魔界宰相？　ああ、厄介払いできたって喜んでいたけど」

ひくつ、と頬を引き攣らすお嬢。

「は、ハンコも押したんだ」

「どうせいらぬ書類だし、その気にさせといたほうがいいだろう」

がく、とついには膝をつく。まあ、さすがに哀れだと思わなくもない。

とはいえ、遠慮するつもりもなく。

見渡したところ幸いこの公園と呼ばれる空き地には、今のところ人はいない。騒げることを確認した後、とりあえずお嬢に近寄ってその艶のある金色の髪を引っ張り上げ、立たせた。

「痛い、痛い！ 抜ける！ はげる！」

「ほら、で、金は？」

「え、えつと」

「うん？」

「と、盗られちゃった。てへっ」

「やっぱり」

ぱつ、と手を離すと、お嬢は飛び跳ねるように俺から離れた。髪を抑えて潤んだ目で俺を睨むが、完膚なきまでに無視。

「あー。面倒臭いなあ。もう帰ろうかなあ。やる気ないしさ」

ちようどよくあつたベンチに座り、ため息。くしゃくしゃに頭を掻いた。ちらつとお嬢を見れば、帰れ帰れと手を振っている。まだ焼きを入れるのが足りなかったか。

「で、その肝心の救世主はどこにいの？」

「え、えーと、その真に言いくいんですが」

お嬢は指と指をつついて目を逸らし、躊躇った後、そっと人差し

指を俺に向け

「俺に何か用か」

おいおいマジですか。

第二話 下僕生活の始まりか

一瞬で頭を掴まれる。

あ、これ知っている。アイアンクローだ。
と、思うと同時。

万力に締められる痛みっていうのはこういうのを言うんですね。

「痛い！ 痛い！ 半端ない！」

「いえーい！ やれやれ光輝！」

あ、やばい。今マジで殺意湧いた。

ギブ、ギブと腕を叩くが、しばらく解放してくれることもなく、
散々甚振られた後ようやく解放してくれた。

あ、頭から湯気出てないだろうか。

「ん？ 何だ。お前、魔王城に居たガキじゃないか。どうしてここに」

「何？ あんた誰かもわからないくせにアイアンクローしていたわけ」

今度はこっちが涙目で睨む羽目になった。しかしそれも無視して、
この極悪最悪救世主はまるで家畜を見るがごとく冷めた表情で俺を
見下ろしてくる。おお、マジで怖い。

「ちょっとな。昨日、テレビの特番で握力60ならリンゴが潰せる
とか言っていたから。ほら、俺ならどうかって、試したくなるだろ
う？」

「人の頭を潰さないでください」

リンゴのように潰す気だったか。

悪魔よりも悪魔なこの救世主。はて、どうする。どうしたら金を返してもらえる？

だけどおかしい。こつちでは盗みは犯罪のはずなのに、どうしてこつちも悩まなくてはいけないのだろう。

「まあとりあえず、菓子でもどうぞ。魔界特産の地獄目玉潰けと生首クツキーです」

「うん。こつちも迷惑な土産を俺は未だかつてもらったことがない」

「そんな！ 美味しいのに！」

いらぬなら余が食べるぞ！ とお嬢は手を出して、どこからともなく出てきたシャーペンで救世主にぶっ刺された。それにお嬢は、ちよつと冗談じゃないくらい痛がっている。今のその気持ちは痛いほどわかるが、正直ざまあみろである。

「それで、こんな菓子折りまで持ってきて、一体何の用だ」

「お嬢から奪った金、返してください。魔界は財政難で国民皆が納豆を食べています」

「うん、お嬢？ ああ、こいつのことが」

「ええ、そいつのことです」

こいつかそいつとか言うなあ！ とお嬢は怒鳴るが共通見解によりスルー。

「それは無理だな。下僕のは主人のものだ」
「げ、ぼく？」

お嬢を見れば、汗を滝のようにかいて空を見ながら口笛を吹いている。そんなベタな、とツツコミを入れるべきか。まあ、それは置いていて。

「かつての魔王ともあるう方が」
「う、う、うるさいなあ！」

真っ赤になつて怒鳴る姿に威厳など蟻の脳ほどもない。全然ない。空を見上げた。ああ、この世界の空は赤いのか。夕日に染まつて茜色。鴉も鳴くし、悪魔もいるし、下僕らしい魔王もいるし。何か超面倒臭い。

「じゃあ、もういいや。俺帰ります。どうせ、あんたから金取り上げるの無理だし」

「待て、誰が帰すと言った？」
「いえ、だから返さなくていいですって。諦めますから。面倒だし」
「そうじゃない。誰が、お前を帰すと言った」

その言葉に回れ右して全力ダッシュ。

しかしそんな努力も空しく、救世主は俺の襟首を掴んで持ち上げる。何か鶏を絞め殺したような声が俺の喉から聞こえた気がしたが、定かかどうかわからない。そのまま救世主は俺を投げることなく、肩へと担いだ。

「よし。下僕2号できあがり」

その声に今までなかった喜びという感情が含まれているようで、正直絶望。

「あの、すいません。誘拐ってここでは犯罪ですよね」

「そうだな。法律に守られる人間は」

「あの、すいません。ここって下僕とか奴隷とかそういう制度ないですよ」

「そうだな。俺以外の人間は」

「モラルとか道徳とか、習いました？」

「睡眠学習で」

項垂れる。ああ、だからこんな世界に来たくなかったんだ、ちくしょうめ。

「異世界で稼いだ金で豪邸を買ったんだが、生憎使用人はなぜかすぐ辞めちまってな。人手不足なんだわ」

「そりゃあ、まあそうでしょうよ」

その性格なら。

「魔王もいるが、役に立たない。それに他に雇うにしても、どうせならがさつな男よりも女のほうがいい」

役に立たないって何だあ！ と聞こえないように小さく怒鳴る魔王。抗議が弱いのが切ない。

それよりまあ、気付かっていたか。

「ハーレムでも作る気ですか」

言ってから、後悔した。やべえ。洒落にならん。

「そうだな、それもいい」

不敵に笑う、救世主。

「というか、お前が魔王だろう。」

「俺は女じゃなくて両性具有ですよ」

「かまわんさ。人手不足と言っただろう」

何かもう無駄みたい。

諦めてため息。もう本当に何から何まで面倒だ。

「ふふん、何だ。お前も下僕になっただじゃないか」

「何ですか、下僕一号」

お嬢にぎゃあぎゃあ、耳元で喚かれたが、そうすると必然救世主の耳にも留まるわけで。

救世主の一睨み。

で、ぴたつと押し黙る。

「そういえば、名前を聞いていなかったな」

「いいですよ。好きな名前で。もう何だか面倒臭い」

「そうか。……じゃあお前の名前は」

それが始まり。夕焼けに救世主と、魔王と、側近の影が伸びる。こうして面倒臭い共同生活　もとい下僕生活は幕を開けるわけ。

マジで勘弁。

第三話 いいともと叫びたくなる

「シロ。腹が減った飯を作れ」

何だか納得のいかない名前を付けられ、一週間。一週間もすれば案外それも馴染んでしまうものだけど、呼ばれて振り返ってしまった自分に今更ながら悔しくなる。

「いいですよ。目玉入りスープと小指和えサラダと血色ご飯でいいですか」

「……とりあえず、人間が入っていないものを作れ」

かつては死四天王と呼ばれた自分だが、今では極悪救世主の下僕。それに屈辱を感じないと言ったら嘘になるが、そんな自分を自分以下の存在を見ることが癒している。

「光輝！ どうしよう！ 今日の分の卵がない！」

すでに主婦と化している元魔王エローラ＝ロベス。通称お嬢は、言われていないのにもう昼食の準備に取り掛かっていた。さすがに一日の長があるのか、こっちの料理に関してはお嬢の方が詳しい。どうやら人間は人間を食べないが、豚の腸を引きずり、牛の舌を引き抜いて、鳥の子供を食べるといふ悪辣ぶりなのだと脅えた表情で語っていた。まさか、と鼻で笑ったが、実際に顔を血で濡らす生々しい救世主を浮かべてしまい、あながち冗談でもないことに気付く。

「卵ぐらいなくても何か作れるだろ」

「だって、冷蔵庫の中空っぽだぞ。白いご飯しかないんだ。せつか

くオムライスを作ろうとしたのに」

残念そうに語るお嬢。果たして、こいつは魔王だったのかと過去を思い出してみるが、まあ昔もこんな感じだったなと納得。

「仕方ないな。シロ。じゃあ、何か買ってきて来い」

ほら、と財布から通貨を渡された。

はて？ 食材を確保するのに通貨がいるのか。

本気で首を傾げる俺に、救世主はああ、と気付いたような顔。お嬢は勝ち誇つたいやらしい笑みを浮かべた。

「お前、買い物システムとかわかるのか」

「ふふん。何だ、シロもたいしたことないな」

とりあえずシロと呼んだお嬢にコブラツイストをかけながら、不満顔をつくり答える。

「わかりますよ。一応、魔界にも通貨はありましたから。まあ、いいです。適当に集めてきますから。人間はいらないんですよね」

「……何をしようとしている」

「ちゃんと狩って」

「出前でいいか」

広告を片手に電話をかけようとする救世主。何か間違っていたのだろうか。どうやら異世界間でのギャップはそう簡単に埋まるものではないらしい。お嬢は何気に順応が早いんだな、とホールドしているお嬢を見ると、お嬢は白目を剥いていた。放すと、糸の切れたマリオネットのように崩れる。一瞬ある種の不安が頭を過ぎるが、見なかったことにしよう。昼から寿司と呼ばれる高級料理らしいものを頼む救世主を片目に、とりあえずテレビをつけた。最近の習慣

はいいともを見ることだ。

第四話 征服と頭に過ぎる

ぎゃああああ、と人間の断末魔が鳴り響く目覚まし時計を止めて、ベッドから這い起きる。

目を擦りながら時刻を見ると、六時半。早い。昔ならお昼までは寝ていられたのに、とぶつぶつ文句を言うが、今は所詮下僕の身。かつての魔王の側近。死四天王の一人として恐れられ、背徳の才力と呼ばれた自分は、朝から掃除、洗濯、料理に忙しい。正直悲しくないと言ったら嘘になるが、それでも自分以下の存在を見て、そんな自分を励ましている。

「光輝！ 朝だぞ！ ほら、さっさと起き い、いいい、痛いっ！ い、いや、あ、朝からアイアンクローは、あ、ちよつと、洒落じやなああああああああああああああ！」

すでに救世主のオモチャと化している元魔王エローラ「ロベス。通称お嬢は、いつも救世主を起こす役目は自分のものと考えている。いい加減朝に奴を起こす危険性を分かってもいいはずなのに、とため息を吐くが、まあ元から少し足りない子だったなと納得。ちなみに救世主は低血圧だ。

「学校、ですか」

いつもと雰囲気の違い変わった服装に疑問を感じて尋ねてみると、

学校、と不機嫌そうな一言を呟かれた。

現在、朝食中。まだこの時間は救世主の不機嫌メーターはマックスだ。下手に触れてはいけな爆弾のよう。

「何だ、学校も知らないのか」

ふふん、と得意そうに笑うお嬢。その格好は救世主のとは様相を異なるが、どこか通じるものを着ていた。聞いてみると、セイフクと呼ばれるものらしい。

「で、お嬢。その格好はもしかして……」

「余も、今日から二年生だ」

自慢げにその豊満な胸を張るお嬢。何だかむかついたので、半熟の目玉焼きを潰してやる。ああ！ 余が潰したかったのに！ と悲鳴を上げるお嬢を無視してパンに齧りついた。

「あんた、仮にも魔王だった身でしょうに」

「一年の二月頃からか。こいつが俺の学校に転校してきたのは」

虚ろな目で朝のニュースを見ながら呟く救世主。

昼間は独占しているそのテレビというものを見てみると、最近現れたらしい通り魔のことがやっていた。あらま、随分と粹なことをする人間もいたものだ。結構近い。まだそこまで被害は出ていないようだ。

テレビから目を離すと、不審げに俺を見る救世主と目が合った。はつきり言って遺憾だ。

「救世主を倒すために近づいたのだが、なかなか興味深いぞ、学校は。暇ならシロも来ればいい」

もう定着してしまったシロという名前。お嬢に一々訂正を試みるのも面倒臭くなったので、とりあえず大人の心で受け止めてやることにした。

「あ、ちよつと。それは余が最後に残しておいたウイナー……」

わざとらしく音を立てて食べてやる。ゴックンと飲み込むと、お嬢は静かに鼻を翳った。

「そつだなどうせ暇だろう。お前も来い」

だんだんと意識も覚醒してきたのか、救世主は相変わらず視線はテレビのままだにそう言った。

来ないか？　じゃなくて、来い、なのか。命令なのか。

「何でそんな人間の集まりに。面倒臭い」

「正直、一人でこいつの相手をするのは疲れるんだ」

はあ、とやけに疲れを滲ませるため息を吐く。まあ大方の予想はつく。

「でも、そのセイフクって男女で分かれていますね。俺はどっちを着ればいいんですか」

その言葉に、救世主とお嬢は顔を見合わせる。

沈黙は長かった。時計は静かに音を刻む。お天気お姉さんは朗らかな笑顔で今日は雨です、と告げていた。

棒読みなお嬢の声がその気まずい沈黙を破る。わざとらしく時計を見て口を開いた。

「あー。もう時間だー」

「おお、そろそろ出ないとまずいな」

そそくさと仕度をする二人。

男？ いや、でもそつちの方が危ないか。襲われる気がする。女だと、色々都合が悪いだろ。ほら、トイレとか体育とか身体検査とか。そこは、金でなんとか誤魔化して。

やけに仲良く会話を進める二人はそのまま玄関を出て、見えなくなる。

ぽつん、と椅子に座る俺は何となしに、またパンに齧りついた。別に、寂しくはない。

第五話 傘は使えないことを知る

「やっぱだめか」

二階建ての豪邸とも呼べる広い家。お嬢がいないため一人で行う掃除は拷問に近い。しかし、それはすでに使役魔を行使することではなくか仕上げることでできた。洗濯も、今日は雨ということで取り込んだ。買出しはなぜかやらなくていいとのことで、結果、もう家の中でやることはない。

だからダメというのは家事全般のことではなく、魔術のこと。

意識集中のため閉じていた目を開け、冷たい床の上に寝転がる。魔界へ意識を送り、ハルト宰相と通信しようとしたのだが、てんでダメ。ノイズばかりであっちの世界の魔力を感知できない。「門」を開こうとしても、こっちの世界に漂う魔力量が圧倒的に少なすぎた。それでも自分の内在に溜めてある魔力を使えば不可能ではないのだが、下手したら命の危険だってあるのだ。分の悪い賭けだった。

「鬼のいない間と思ったんだけど」

寝そべって眺める天井は随分高い。生意気に。

何気なく目に力を込めると、その空気中に漂う魔力の淡い光を感じることもできた。俺とお嬢がいるからか、この屋敷内の魔力量は这个世界に比べてかなり多い。おかげでそう息苦しくもないが、高等魔術を行使できるほどではなかった。

静かに目を閉じる。儚く漂う魔力を手のひらに集め、口から呪を込めた言葉を吐く。

「素は火。揺らぐ万物を嚙下せよ。『^{ロスト}暗い炎』」

ぼうつ、と手のひらの上に燃え出す火。それを見てため息。可能な範囲はこれくらいか。初級魔術が関の山だ。
手のひらの上に燃える火球を払い、立ち上がる。

救世主とお嬢は学校とやらで居ないわけで、家事全般も全部終わらせたわけで、いいとも見終ったわけで……正直暇だ。

外を見る。雨だ。お天気お姉さんが朗らかに告げた通りの雨だ。しかし、暇だ。

何かあったときのため、と救世主がテーブルの上に置いた貨幣を何枚か手に取り、散歩へと繰り出すことにした。面倒臭い、と思わないわけではない。ただ、なんとなくもやもやしたこの気分を晴らしたかった。

雨に打たれたまま、わざと鼻息まじりに町を歩く。この強い雨のためか、道を歩く人間はほとんどいなかった。たまにすれ違う人間も、俺に奇異な視線を送ったかと思うと、見てみぬ振りをしてさっさと行ってしまう。

はて。外見は人間とそう変わらないはずなんだが。
首を傾げて、まあ考えるのも面倒だと思いを停止する。人間の考えることなど知ったことではない。

そんな感じで目的地もなく歩いていると、ふと上のほうから視線を感じた。

微弱ながら魔力の波動も。

この世界に、と僅かに驚いて見上げれば、予想を外れてそこには誰も居なかった。ただ代わりに、真っ黒な猫が屋根の上に寝そべっている。

月のような瞳が、俺を射抜いた。

「何か用？」

尋ねると、にゃあ、と一声。

次の言葉を待っていると、猫はそんなことも気にせずに、背を向けてさっさと去ってしまった。

何だっただ、一体。

「ああ、もしもし」

っ！

突然肩を叩かれ、条件反射的に前へと飛ぶ。水溜りの中へと一回転して距離を取ると、気配なく後ろへと立った者を睨んだ。

「……いや、別にそこまで驚かなくても」

「……誰？」

知らない人間だった。というか、知っている人間なんて、あの救世主一行くらいしかないわけだが。

「ただの通りすがりというか。それより、ねえ。どうしたの？」
「どうした？」

別に、どうもしない。ただ散歩途中に猫と会話しようと試みただけだ。

「いや、ほら。この雨の中傘も差さないで、何をしているのかなあと」

そう言っただけ人間は気まずそうに頬をかく。背の高い男だ。自分の身長が低いことも起因していると思うけど、見上げる首が痛い。救世主とは違う茶色の髪に、耳には装飾品。女がつけるはずのものが、と首を傾げる。どう見ても目の前の人間は男だ。ああ、後付け加えるなら、目の前の人間はセイフクを着ている。

しかし、傘とな？

ふと、その目の前の人間の手に持つ物へと視線を移す。男の顔を見る。もう一度視線を移す。

「……これが傘？」

つつん、と人間の『傘』を突くと男は複雑そうな表情を浮かべた。

「傘を知らない？　っていうか、君、日本人じゃないよね。いや、でも外国にも傘ぐらいあるよなあ」

「濡れないための道具、か。でも、足や肩が濡れているじゃん。随分と不十分な道具だね」

「まあ、そうかも。でも、ずぶ濡れよりマシじゃない」

よくわからなかった。雨水は魔力を運ぶ重要な資源だ。この世界の雨にも少なからず、魔力は宿っている。何で、それをわざわざ遮断するのだろう。

「どうでもいいか、面倒臭い。それより、何か用？」

「用、はないけど……風邪ひくよ？」

「そこまでやわじゃない」

「エロイ格好になっているよ」

人間が指差す先には、自分の胸。お嬢ほどはないが、そこそこ大きいと自負している。いや、別にそこはどうでもいい。

救世主に借りたTシャツとやらは雨に弱いらしく、べったりと肌に張り付いていた。皮製と違って水を跳ねないみたい。色は紺色なので透けはしないが、なるほど、確かにエロイ。

「いゃん、えっち」

「うわー。すごい棒読み」

結構自分はノリがいいのかも知れない。新たな発見だった。

第五話 傘は使えないことを知る（後書き）

お嬢がいないとコメディ率が減るなあ

第六話 魔王様も伊達じゃない（前書き）

救世主 光輝視点

第六話 魔王様も伊達じゃない

始業式はつつがなく終わった。

そこで本来なら昼前には帰れるはずなのだが、新一年生を迎える式があるとかで、三年はもう帰ってしまった今でも、二年はその準備に追われている。もちろん、俺は手伝うつもりもない。なぜ、身も知らぬ他人のために時間を取られなきゃいかんのだ。

ただそうは言っても、今すぐ帰るわけにはいかない事情があった。

場所は屋上。

なぜか鍵が掛かっていた扉をその錠ごと蹴り破り、汚れていた地べたを下僕一号に掃除させて、現在昼休み時。今頃出し物の準備をしている奴らも飯を食っている時間だろう。

けれど生憎、俺がこんな人気のない場所に移ったのは飯を食うためではない。魔王は掃除の駄賃としてくれてやった十円でパンの耳を齧っているが。

「このままなわけもないとは、思っていたけどな」

フェンスにもたれながら、手のひらに転がすビー玉よりも少し大きめの目玉。別に誰かのを挟りぬいたわけではない。向こうの世界では散々鬼畜だの悪魔だの言われてきた俺だが、それでも自分は平和主義の事なかれ主義だと自覚している。そう言うたびに遠い目をされてきたが。

これは魔王が魔界から夜逃げの際に持ってきて、俺が当然の権利として頂いたもの。

魔具ハルキオ。

ある対象を「目」として設定することで、この魔具を持つ者はその「目」を通しあらゆる方角方向その他障害物を無視して遠隔視できるといふ優れものだ。

そこで家に置いていった千円札を「目」として設定して「視ていた」のだが、あのガキはやっぱり油断ならねえ。

「魔界への交信は失敗したみたいだが……」

正直、援軍はまずい。

突然召喚された異世界。自分たちの尻ぐらい自分たちで拭けと腹も立ったが、まあ金にはなつたし、単位は金で取り戻せたし、正直ウハウハだったので今になっては不満もない。ただ、あのとき得た『力』はこつちの世界に戻ってほとんど失われた。どうやら『救世主』としての役割を担わされているとき限定だったらしい。

一応、魔具の備えはあるし、こつちの世界ではあいつらの力も制限されるようだ。

「おい、下僕」

「下僕ではない！ 高貴な生まれを持つ優雅で偉大かつ艶美な魔王、エローラ!! ロベス様だ！ まあ、光輝なら特別、余のことをえつちやんと呼ぶ権利を与えてやって……」

うざいので、パンの耳を袋ごと取り上げる。魔王は精一杯つま先立ちをして手を伸ばすが、届かずに半べそをかいた。

「おい、下僕」

「……はい、なんでしょう」

パンの耳を一つ投げた。それを慌てて拾う魔王。

「いいか、これから一つずつ質問する。それに答えることができた
ら、パンの耳を一つくれてやろう」

「え？ でも、それは余の貰った十円で買った……」

魔王は悲しそうにサクサクパンの耳を齧りながら呟く。当然、それ以外にこいつの昼飯はない。命を奪いにきた輩に飯を奢るほど、俺は豪気な性格じゃないんでね。

「一つ。シロの本名は」

「オルカⅡドリトエツト」

一瞬の間もなく見事に身内を売った阿呆にパンの耳を一つ投げてやる。それを魔王は今度は頑張つて口でキャッチしていた。何となく、ハトにポップコーンをやったときのことを思い出した。

オルカⅡドリトエツト、と一応頭の中で復唱。対象の真名を知ること使用可能になる魔具もある。

「二つ目。シロの得意魔術は」

「火だな。死四天王はそれぞれ四元素を一つずつ担当しているから、むしろ火しか使えない」

そこでまたパンの耳を取り出し与えてやる。それを勢い余って握りつぶしてしまい、悲しそうな表情を浮かべる魔王は、しかしすぐに不思議そうな顔へと変わった。

「光輝だって、戦ったんだから知っているだろ？」

「いや、実はあいつとは戦っていないんだ」

そうか。と納得しそうになつた魔王は、すぐに、ええええええええええ！ と驚きの声を上げた。耳が痛い。滅ぼしてやろうか。

「なんで！」

「あいつに戦う意志はなかったし」

思い出す。

奇妙な幾何学模様に満ちた歪な部屋で、シロは宙に浮きながら本を読んでいた。こっちの一行にはたいした怪我もなく、むしろ俺から離れようと最後尾争いをしていたが、そんな中であいつはあっちに行けば魔王様の部屋だよ、と酷く眠そうな声で告げた。

『何のつもりだ』

『別に。あんたと戦うのが面倒臭いだけ』

そして男か女かもわからないその綺麗な顔立ちをこちらに向け、やる気のなさそうな顔は一瞬、苦虫を潰したような表情になった。

「それに俺、あいつの事嫌いだし」

「嘘だあああああ！」

「いや、ス」

ドンドン、と地べたに手を打ちつけ嘆く魔王。

今までのシロの態度を見てみれば、そんなことはすぐにわかりそうなものだが。というか、好かれていたつもりだったのか、こいつ

は。

「だ、だって。余とシロは友達だったんだぞ。ずっと昔から！ 幼馴染だったんだ！」

ちーん、とテッシュで鼻をかみ、魔王は回顧するように目を空に向けた。

「そうだ。昔から、えっちゃん、おっちゃん、と呼び合う仲だったんだ。恥ずかしがってその呼び名は止めてくれと、シロはいつも嬉し涙を流しながら喜びに声を枯らしていた」

「なるほど」

「それから、ずっと一緒だったんだ。年も近かったから。いつも遊んで。血の沼に泳ぎにも行ったし、灼熱の山にハイキングにも行った。針の崖からバンジーも試みた。弱肉強食が魔界の理。帰りたいと泣くシロを、それじゃあ生きていけないと強く諭して。それなのに、なぜか知らないけど途中から急に冷たく……急に、冷たく……」

うん？ と魔王は首を傾げる。

「あれ？ そういえば、何か原因があったような、ないような」「言わなくていい。今ので大体わかった」

魔王と呼ばれるのも伊達じゃない、と痛感した。
人生を達観したような、何もかも面倒臭そうなシロの顔を浮かべる。

そうか。被害者だったのか。

心の底から同情するも、それなら多少は酷使しても大丈夫だろうと安心。これからはトイレ掃除も追加しよう。

それから昼時を、魔王に餌を与えることに費やした。

第七話 文明とは何か（前書き）

序話から第二話にかけての題名を訂正しました。中身は変わっていません。いやあ、適当につけすぎだな、と反省。

第七話 文明とは何か

じーっと、一瞬の間すら見逃すこともなく、注視する。

その容器には歪な形の鉄器からお湯が注がれ、再び封印が施された。思わず壁に掛かった時計を見ると、その針の進みは予想以上に遅い。爪を噛んで苛立ちを抑えていると、お嬢は指を机に打ち付けていた。救世主は何やら冷めた表情でこちらを見ているが、まあこいつはいつもこんな感じなので気にしない。

悪夢よりも長い時間。針は三度回り、ふとお嬢を見ると、お嬢もこちらを見て頷いた。

ゆつくりと、慎重に、その封印を剥がす。

「おお！」

「……本当にできている」

お嬢は驚嘆の声を上げ、俺は僅かに目を見開く。箸を取り、麺を持ち上げれば、また思わず息を呑む。見事な料理がいつの間にかに完成していた。

「カップラーメンに何でそこまで感動できるんだよ」

ずずーっ、と麺を吸いながら救世主は随分と呆れ顔。

だがしかし、この画期的な大発明に驚かない救世主のほうが驚きだ。これに驚かないとは、こちらの世界は俺たちの世界よりも随分

高度に発達した文明を持つらしい。

ふー、と思わず息を吐く。

「人間も侮れない」

「お前ら、それよりテレビとか洗濯機とか他に文明を感じるものはなかったのか」

「何を言っているんだ、光輝！ そんなものの『かつぷらーめん』に比べれば！」

お嬢は麺を啜り、スープを飲み、四角い肉を齧って幸せ顔。

「この世界の文明は『かつぷらーめん』に凝縮されていると言っても過言ではない！」

「マジか」

救世主はものすごく真剣にかつぷらーめんを睨む。

「俺も、これからお昼はカップラーメンでいいです」

慣れない箸で卵を掴んで、口の中に入れる。温かい。三分しか経ってないのに。不思議だ。

「まあ、俺としては安上がりだからいいんだが」

カップラーメンを睨みながら、それでも納得していない顔の救世主はそう承諾した。

やった。心の中でガッツポーズ。お嬢は見事に浮かれ、小躍りしていた。

カップラーメンなるものを今まで食べたことがないという、そん

なお嬢の告白から出た日曜の昼。お嬢にこんな感情を抱くのは百五十年ぶりだが、今回ばかりは感謝してもいい。

それからリビングには、ただラーメンを啜る音とお嬢の歓喜の声ばかりが響いたが、ふと思い出したように救世主が顔を上げた。

「そういえば、シロ。決まったぞ」

「決まったって。何がですか？」

ずずつ、と麺を口につけたまま答える。

「学校だよ。ちょうど今から入ってくる一年に組み込もうとも思ったが、まあ同じクラスの方が何かと都合がいい。校長にはもう頼んでおいた」

「……それは、本当に頼んだのですか？」

「ああ、札束を頬に叩きつけてな」

金で解決できねえことはねえ、と語る救世主から邪悪な波動を感じたのは気のせいだろうか。一心不乱に麺を啜るお嬢を横目に、運命の不条理さを嘆いた。魔王となる人物を間違えている。

「で、俺はどっちの制服を着ることになったんです？」

「男子だ。男なら俺のほうでフォローできる。女子だと……」

こいつだからな、と見るお嬢はスープを綺麗に飲み干し終わった直後だった。ほくほくの笑顔で、うん？ 何だ、と答えるその顔に邪気の欠片もなく。

その清らかな白い頬には面のカスが付いていた。

「わかりました」

「おう」

頷く俺と救世主。お嬢は頭の上にクエッションマークを氾濫させているが、無視。気にせず俺も食べ終えようとすると、何かぼそつと救世主が呟くのが聞こえた。

「何か言いました？」

「うん？ いや、別に」

それから顔を背けた救世主は、静けさを破るようにテレビをつけた。

昼のニュースはまた例の通り魔の事件で持ち切りだった。こめんと「たー」とやらが未だに捕まえることができない警察の失態をなじっている。それを特に思うところなく見ていると、ふとこれから通う『学校』という言葉に、この前雨の中に出会った人間を思い出した。

『ここまで遅刻なら、もう気にしないでいいし』

笑いながら、いらないうつのに傘を押し付けてきた人間。そういえば、あいつも同じ制服を着ていたな。

女とばれている人間がいることを言おうかとも思ったが、一々細かな点まで告げる義務もない、と口を閉じた。それに、同じ所属で同じ学年であるとも限らない。もう二度と会わない可能性の方が大きいわけで。

考えながらカップに口をつけると、飲み干そうとするスープを物欲しそうに見るお嬢に気付く。せっかくだから、ああおいしい、と一口飲むたびに言っただった。

お嬢は酷く悔しそうだった。

第八話 学校って変だ

「オルカ」ウィツテ、と言います。まだ日本には不慣れなので行き届かないところもあると思いますが、どうかよろしくお願いします」

笑顔を作ろうとしたが、顔面の筋肉が動かず断念。諦めてただ一応頭は下げておくと、ざわめきと呼ぶには余りにもけたましい騒音が、教室に駆け巡る。

超うるさい。

その耳を破るような騒音に、つい滅却魔術の呪文がテロップのように脳裏に流れた。魔力が足りないことをこの世界に来て重ねて悔やむ。心の中で唱えるだけで我慢した。

「ええと、オルカ君はロシア生まれみたいです。お人形さんみたいです。ねー。みんなが騒ぎたくなる気持ちもわかるけど、静かにしようねー」

にこつ、と。まだ年若い女の先生は微笑んだ。名前は確か、雛森、と言ったか。

本人確認ということで昨日訪れた職員室。そこで担任となる先生の挨拶と、ついでに聞かされた注意は、とりあえず雛ちゃんと呼ぶな、に限った。涙目でやけに真剣に頼み込まれたのを思い出す。あだ名にはこちらとしても嫌な記憶があるので、頷いておいたが。

その雛森先生の声は誰の耳にも届かず、ざわめきが収まる様子もない。

あだ名からして、なめられきっているらしい。

「お願いだから、ね。し、静かに。き、聞こえるかなあ？」

依然変わらず。

その現状に、くしゃっ、と雛森先生は顔を歪ませた。

「ええっと……そっか、聞こえないか。大学出たばかりの新人教師の声なんて、誰の耳にも届かないか」

ひくっ、とその先生の喉から音が。

その担任の様子に、段々と教室の騒音も落ちていく。

「ううん、いいの。わかっているの。どうせ、声は小さいし、教える方は下手糞だし」

皆が顔を見合わせる。やばい、来るぞ。そう顔に出ていた。

「問題の質問に来る生徒は、教えているはずの私のところに来ないし。問題児は皆、私に押し付けられるし。体育の先生は迫ってくるし、教頭は私のこと馬鹿にするし。どうせ若いだけしか取り得のない、ただの鳥頭ですし！」

ダンッ、と叩きつけられる教壇。

水を打ったような静けさの教室。

静まったそれに雛森先生は安堵するわけではなく、う、うう、うわーん、と泣き出してしまった。子供のように。

気まずい沈黙がそこにはあった。皆が顔を向き合わせ、責任を擦り付け合う。

だが、そこで一人の生徒が立ち上がった。

「そんなことない！ 先生はすごいぞ！」

聞き覚えのある声だった。とりあえず目を逸らしておいた。

「先生が、金魚に毎日欠かさず餌をあげているのを余は知っているぞ。植木鉢に水をやっているのも、顧問になった部活で毎日来てくれているのも。それに、ちゃんと授業で効率よくできないところを改善しようと、夜には職員室に遅くまで残って頑張っているのも、全部知っているんだ！」

なあ、みんな！ と目立つ金髪の魔王はクラスメートを振り仰ぐ。そうだ！ そうよ！ とクラスは立ち上がった。

「誰が何と言おうと、雛ちゃんは俺たちに必要なんだ！」

「雛ちゃん以外の担任なんて、私考えられない」

「いつも困ったときには、雛ちゃんが僕らの傍にいてくれた」

「騒がしくして、ごめんなさい。でも、雛ちゃんの声はちゃんと私たちに届いている」

だって、と声を上げて。クラスの皆は仲良く目配せ。涙の止まった先生を見つめる。

「『雛ちゃんは、このクラスのマスコットだから！』」

うえーん、と泣き混じりの叫び声が廊下に木霊した。

走り去って職場放棄した先生を尻目に、眼鏡をかけた男子生徒は「後ろの開いている席に座ってくださいね」と促した。「こんな感じの楽しいクラスですから」とおさげの女子生徒もにっこり微笑む。

これでいいのか学校は、と疑問に思うが、まあ茶番は終わったよ
うなので大人しく従おう。指示通りにその窓側の一番後ろの席に腰
を下ろすと、同時に一斉に人間が集まってきた。

「うわー。すごい綺麗。目とか髪とか、銀色っていうの？ 朝日に
輝く雪みたい」

「本当に、お人形さんみたいねー。これで男の子っていうからびっ
くり」

「なあ、演劇部に入らないか。君みたいな美少年を部は待ち望んで
いた！」

「いやいや、それなら軽音楽部もそうだ」

「生まれがロシアだって。それなのに、すごい日本語上手だね」
「日本で暮らしていたことはあるの？」

すさまじい雑音。すさまじい質問の嵐。

どれもこれも騒がしいばかりでこちらの事情を考えもしない。見
ろ、この俺のめんどいです、って顔を。

いい加減うんざりしていると、人垣がかの有名な魔剣ディアメロ
の伝説のごとく、一人の人間を通すため、分かれていった。背後か
ら寄ってくる悪夢に、本能が警告を発したらしい。鈍感な生徒はそ
れにも気付かずにこちらに未だ質問を投げかけていたが、叩かれた
肩に誰かがいることに気付き、振り向いた後ろにいる人物を見て小
さく悲鳴を上げる。その生徒は尻餅をついたまま、ものすごい勢い
で離れていった。

「あんた、一体学校で何してんですか」

「別に何もしてないはずだがな」

おかしいな、と三日月型に口を歪めて笑うその悪夢の具現者。

救世主 ではなく緒方光輝（そう呼べと脅された）は、散れ、

と手を振った。すると、まるで殺虫剤をかけられたゴキブリのごとく、クラスメートは各々の席へと戻っていく。

「転校初日で面倒も多かろう。俺がお前の隣になってやる」

どけ、と蹴られた俺の隣のにきび顔の少年は、泣く泣く光輝が退いた席へと移っていった。

「ふー。やっと窓側の席が取れたか」

「悪という存在を肌で感じました」

力強く頷く俺に、魔界の住人が何を言う、と光輝は鼻で笑った。

「まあ、これでも實際気を使っただ。俺がここにいればお前にもそう人も寄ってこないさ」

その言葉通り、今日一日光輝という間は人が寄ってくることはなかった。正直面倒なことを省けたのは感謝するが、一体、こいつは裏で何をやっているのだろうと恐ろしくもなる。こいつの鬼畜な部分は同種の人間に対しても有効らしい。

結局、その日は授業を淡々と過ごすだけで終わった。

雨の日に出会った人間は、見かけなかった。

第九話 月が満ちて（1）

学校に通うになって幾日。

次第に慣れてきた人間集団との共同関係及び共同生活。とりあえず、光輝の近くに居ればそうそう人に囲まれることがないことを学び、休みの時間はだいたい光輝とお嬢と過ごすことで時間を費やす。問題だと思っていた着替えのときも、トイレで着替えれば何の苦もないことを悟り、授業もまあ寝ていれば終わる。興味深いところは聞いているが、生憎この世界の文学や歴史にそう興味はない。

というわけで、今のところ学校生活にそれほど支障を来たすこともなかった。

月が満ちる、今日という日までは。

「熱があるんです。だから今日は学校を休みます」

「黙れ。熱ごときで学校は休むものじゃない」

風強えから休むか、と言っていたのはどのどいつだ。

いいからさっさと布団から出る、と無情にも毛布越しに蹴つてくる救世主もとい暴虐の悪夢もとい光輝を前に、俺は毛布に包まって徹底抗戦。

別に熱を移すからだめなのだとか、そう健気な下僕根性があるわけではない。ただ、絶対に今の俺の姿を奴に見せるわけにはいかなかった。蓑虫のごとくひたすらその慈悲のない攻撃に耐えていると、遠慮するような声がその攻防を遮った。

「あ、あの……光輝。今日ぐらい休んでもいいんじゃないか」

「却下だ。むしろ、こうも抵抗されると意地でも出したくなる」

鬼や、あんた。

今の俺にやれることはない。毛布を引っ張り合いながら、熱でまとまらない思考で、お嬢に「なんとかしろ」と念を送り続けるしかない。

それが通じたかどうかは知らないが、お嬢は焦ったように光輝を抑えたようだった。ばたばたと慌しい音が聞こえる。

「え、えつと。だ、ダメだ、光輝！今日は満月なんだぞ！」

ぴた、と布団を引っ張る手が止まった。目だけ毛布の隙間から出して様子を伺うと、光輝は怪訝そうにお嬢の顔を見ていた。

「……それがどうした？」

「そ、その。今のシロは人間の形態をしているが、実際はそれも体内の魔力をコントロールしているからで」

魔力の薄いこの世界でも原理は変わらない。

魔物が人間へと化けると、本来魔物型の身体は魔力コントロールによって人間の形に組み変えられる。これはかなりの高等技術で、相当の鍛錬がないとできないのだが、俺ぐらいのレベルになればそれも容易い。だが、それも『月が満ちていない』という条件の下で、だ。

こちらの世界にも月があるように、俺たちの世界にも月はある。どちらの月は絶えず魔力の波長を放出しているのだが、満月の際のその魔力放出量は異常だ。それを浴びれば体内のコントロールなどできないほどに、魔力量と魔力の流れを狂わされる。

たどたどしいお嬢の説明を受けた光輝はそれでも納得できないよ

うに、毛布に包まった俺を見て、お嬢を見た。

「じゃあ、お前はどんなんだ。何も変わってないぞ」

「よ、余はこれでも魔王だ。満月の力程度で体内の魔力を狂わされるほど、乏しい魔力は持ち合わせていない！」

後で覚えとけ、この野郎。

その膨大な魔力もまるで使いこなせてない奴に散々言われ、それでも今日という日は抵抗できず、ただ成り行きを見守った。

頭がぼーっとしてくる。目が霞む。

それでも、この毛布という名の城壁を崩すことはできない。ふと、この姿を光輝に見られてしまったときのことを想像してしまい、鳥肌が立った。何をされるかわからない。いや、それよりも、何をしてもしょうがわからない。

それから目だけ出した俺に、光輝はじーっ、とその目を余すことなく睨みつけて、背に滝のような汗をかく俺を尻目に、諦めたように手を離れた。

「わかった。今のお前は魔物型に戻っているから、学校にはいけない、と。なるほど正論だ。さすがに、俺も見るからに魔物の姿な奴を学校には連れていけない。そう言われたら、俺も諦めるしかねえ」

光輝は肩を竦め、出口へと足を進める。

ほっ、と息を吐き、一瞬手を緩めた、その瞬間

「なーんて、言うわけあるかー！」

毛布を捲り取られた。

露になるその自分の姿。

毛布を取り上げた状態固まる光輝。

ムンクの叫びをその身体で体現するお嬢。

うーそーつーきー！と心の中で力一杯叫んだ。

三すくみは、戸惑ったような顔を浮かべた光輝が、ゆっくりと手をこちらに向かって近づけたことで

「きゃあああああ！ 犯されるう！ えっちゃん、助けてえ！」

壊れた。

パタパタと背に生えた翼で飛んで、慌ててえっちゃんの後ろに隠れる。

驚いた顔を浮かべたお嬢は、しかし、妙に嬉しそうな表情を浮かべ、

「よし、まかせろ！ 余が守ってやるぞ、シロ！」

光輝の前に立ちはだかった。

頬をかき、気まずそうな表情の光輝はあー、と視線を天井に向け、床に向け、えっちゃんの背後に隠れた俺に向け、えっちゃんを見てため息を吐いた。

「わかった。今日は寝てろ。ほら、もう遅刻だ。行くぞ、下僕」

強引にお嬢の髪を掴み、出口へと引つ張る光輝。それに悲鳴を上げながらも、お嬢は一度心配そうに俺を見て、それでも力ずくで連れ出されてしまった。

静かになった寝室。

それに安堵の息を吐き、熱っぽい身体を再び布団の中に戻す。

何か取り返しのつかない過ちを犯した気もしたが、深く考えず、
また眠りについた。
いい夢が、見れる気がする。

第十話 月が満ちて（2）（前書き）

救世主 光輝視点

第十話 月が満ちて（2）

「どういうことだ」

登校中も、授業中も、頭から離れないその映像。

俺がくれてやった水玉模様の大きめのパジャマを着ていたシロ。

別に、それはいつものことだ。どうってことない。

ただ、あれはいつものシロじゃなかった。いつもは中学生程度にしか見えなかったのに。

そうだ。いつものシロはあんなに、髪は長くない。あんなに、目は潤んでない。あんなに、頬は上気していない。あんなに、腰はくびれてない。あんなに、胸は大きくない。あんなに、エロくない。いつもの無表情はどこにいったのか。妙に悩ましがな顔で、こちらを見る銀色の瞳。ベールのような銀色の髪。濡れた紅い唇。パジャマから覗く白い陶磁器のような足に、折れそうな腕に、その谷間を作る胸元。

「うおおおおおおおおおおお！」

やばい、やばい、やばい！

慌てて、危うく18禁に突入しそうな妄想を打ち払う。

おかしい。俺はこうも欲求不満な中学生並の妄想力を持っていただろうか。自分の限界を超えそうだ。

「シロは一応、インキュバスやサキュバスといった魔物の一種だからな」

魔王はハムサンドを食べながら暢気に言った。

昼休み。再び屋上で魔王と緊急会議中だった。事態は一刻の猶予

もない。

「魔物化って、変だろ。どう考えたって、ありゃあ別人だ」

「満月の波長は、魔物化だけを引き起こしたわけじゃないみたいだ」

ハムサンドを食べ終え、ちゅーちゅーとコーヒー牛乳を啜る魔王。えっちゃんと呼ばれたのがよほど嬉しかったのか、こいつは今日一日中、終始ニヤニヤしている。今はニタニタしている。いつもは、まおうー、とふざけてじゃれついているクラスメートも、今日ばかりは半径5メートル以内に近づかなかった。

「……説明しろ」

「もともとな、淫魔は生まれた当初が両性具有で、百を越えたときに性別が決定するんだ。だからシロはとうの昔に性別が決定してもいいはずだったんだが、シロは淫魔にしては高すぎる魔力を持つからな。本来なら決定する時期が来ても、その莫大な魔力がそれを阻害してしまっていたらしい」

「それで」

「満月の波長は魔物化を促しただけじゃなくて、元来決まるべき性別を決定しようとしているのかも。ここは魔力が薄いから、大気中の魔力が体内に入って阻害することもないだろうし」

「なんだ。じゃあ、決定したらあのままか」

「まあ、角や翼は人間に戻れば消えるけど」

ああ、そんなものもあったか。別に、そんなものはどうでもいい。

「よし、落ち着け。ビー、クール。まとめよう。まず、満月の波長のせいで、シロは魔物になった。本来角や翼が生えるだけだが」

「魔力の薄いこちらの世界のおかげで性別決定が可能になったんだな」

性別決定は大人になったことを示す証なんだ、と魔王は付け足す。

「それで、どう考えたって、あの身体は」

「サキュバスに決定だろう」

サキュバスに決まったらシロとお風呂に入ろう、と張り切っている魔王。馬鹿野郎、それには俺も混ぜやがれ、じゃない。

「決まったな。おい、魔王。ダッシュで家に帰り、その性別決定とやらを邪魔するぞ！」

「え、何で？ 性別が決まるのは淫魔にとってめでたいことなんだからぞ？」

今日は赤飯だ、と喜ぶ魔王を一発叩く。

「黙れ！ あんなのが家にいておちおち寝られるか！」

襟首を掴み、そのまま引きずる。

ああ！ 余のデザートのワッフルがまだ残っているのに！ と戯けた言葉も聞こえた気がするが、無視だ。午後の授業？ そんなものも無視だ。どうせ、ろくに頭に入る気がしない。

鬼気迫るその表情に、生徒はもちろん教師でさえ道を明けたらしい。もちろん、そんなこと知ったことではないが。

第十一話 月が満ちて（3）

なんだか少し楽になってきた気がする。

ぐらぐら揺れていた視界も次第に安定していった。まだ身体は熱いが、我慢できないほどじゃない。汗で濡れたパジャマを脱ぎ捨ていつものＴシャツとＧパンに着替える。胸元がきつくなったのを実感しながら、洗面台まで移動した。

火照った顔を水で洗う。

タオルで拭きながら顔を上げれば、洗面台の鏡に映る自分の姿。まだ一応の幼さが残ってはいるものの、外見的には光輝やお嬢と同じ年齢ぐらい、もしくは年上程度に見えるだろうか。肩までしかなかった銀色の髪は、今では腰に触れるほどに伸びている。

ふと下に視線を向けると、お嬢に負けず劣らずの双丘がＴシャツの下から主張していた。鏡で線の丸くなった顔と身体を見た時点で分かっていたが、やっぱり自分の性はサキュバスへと決定するらしい。

嘆息。

いつかは来ると覚悟していた判別の儀　つまり性別決定は、今では遅すぎるぐらいなのだが、やはり自分にもそれが訪れてみると奇妙な感覚を覚える。

大人への一步。不安はないか、と言ったら嘘だ。正直恐い。自分でコントロールして人型になるときは、こつも不安を感じないのに止められない身体の変化が恐い。心はもう、大人のつもりだったのに。どこかで子供でいることに甘えを持っていたのだろうか。

それに、サキュバス　女へと変わるのか。
昔のことも、少し思い出す。

『ねえ、えっちゃん。聞いて。ぼく、えっちゃんのお嬢さんになりたい!』

『えー、余は嫌だぞ』

『……え。な、何で? え、えっちゃんは、ぼくのこと嫌い?』

『うっん、好きだ!』

『じゃあ、何で!?!』

『だって、おっぱいがあるお嬢なんて、余は嫌だ!』

ビシッ、と鏡にヒビが入っていた。

鏡の上に置いた手は、知らず知らずの内に力が籠っていたらしい。……ふ、所詮昔の話だ。愚かだった幼い自分。別に、思うところもない。サキュバス? 結構じゃないか。今更男の性に未練はない。未練はないとも。

まだ頭が重い。再び寝ようと足を寝室に向けたとき、玄関からは鍵を回す音。そしてひどく慌てた足音が二人分、こちらに近づいて、通り過ぎていった。

「……………おい、シロがいないぞ!」

「ええー! そ、そんな。せ、赤飯を買いに行ったのかな!?!」

洗面所を出て寝室に戻る。

光輝とお嬢が二人、空になったベッドを前に立ち尽くしていた。まだ学校は終わっていないだろうに。面倒になってさぼってきたのだろうか。

「俺がどうかしました?」

「うお！」

「ぎゃあ！」

……そんなに驚かなくても。

ちよつと内心傷つきながら、懽然とした表情で二人を見据える。

光輝は視線をあらぬ方向へと向け、お嬢はなぜか妙に輝かしい笑顔を浮かべている。

「シロー！ もう性別は決まったのかー」

わー、と抱きつこうとしたお嬢を、顔を掴んで食い止めた。

「まあ、多分。まだ熱っぽいから、今日の夜ぐらいまで掛かるとは思うけど」

「そ、そうか。な、なあ。ところでシロ。この手を退けてくれないか」

私とシロの仲じゃないか、と手の隙間から微笑むお嬢。ぞく、と背筋に寒気が走る。何だろう。新たなネタだろうか。リアクションがいつもと違う。

「どうした、お嬢。妙に馴れ馴れしい」

な、馴れ馴れしい？ と傷ついたようなお嬢の顔。離れた手でホッペを挟む。タコのような口になってお嬢は抗議をしようとした、が、途中で光輝に遮られる。

「今はそんなことはどうでもいい。おい、シロ。まだ性別決定は行われてないんだな」

「まあ、一応……っ！」

光輝の姿を その黒い瞳を視界に入れて、意識の上で光輝を捕らえて。

どくん、と心臓が高鳴った。

ま、まずい。

忘れていた。熱があるためか、昔のことを思い出していたからか。どちらにせよ、注意力散漫になっていたことは否めない。

昼間。太陽の眩い光でその姿を遮られていようとも、満月は確かに空に霞みながらも浮かんでいる。その異常を来たす魔力の波長は、魔物本来の姿を映し、そして、堅固な理性すらも溶かしてしまう。本能が、理性を喰らう。

「……っ、あ、あああ」

「おい、どうした。シロ」

胸を押さえて、しゃがみ込む。馬鹿、来るな。お嬢、呆けてないで、察しろ。

気遣いからか、それとも立たせようと試みたのか。

俺へと伸ばしてきた光輝の手を、誰かの手が、掴んだ。

誰の手が？

俺の手だ。

可笑しいほどにびくつと反応した腕に、笑った。

クス、と悪魔の笑みが。

「……シロ？」

怪訝な声。光輝の顔には不安が浮かんでいるだろうか。上げた顔に、光輝とお嬢は息を呑む。

光輝の瞳には、俺の姿が鏡のように映っている。赤い瞳。銀だつたあの瞳は、今もう見えない。

「まずい！ 『魅了の瞳』だ！ 光輝、見ちゃだめ！」

「……ば、か、野朗。い、言うのが、遅いわ！」

必死に身体を動かそうとしているのがわかる。嬉しい。抗おうとしているのが、肌で感じる。ぞくぞくする。

立ち上がり、そつと光輝の頬に手を添える。睨む瞳に、かつて見た力はない。抗おうとしながらも、本能はどこかでそれを受け入れている。望んでいる。そうでしょ、光輝。

近づく目と、鼻と、吐息と。

静かに目を閉じ、唇を近づける。

「……ま、おう。魔王！ 顔を隠しながら鑑賞するな！ いいからさつさと早く出せ！」

「わ、わわ！ う、うん」

ギャラリィがうるさい。

眉を顰めてお嬢を見ると、何か球状の物を投げてきた。

しかし、遅い。

パシ、と手で払うと、それは破裂。パンツ、と小気味いい音とともに、粉が舞う。何だ？ と疑問に思うのと同じ時。

ふ、と視界が暗転した。

崩れる身体を、動けるようになったのか、光輝が支える。

「間に合ったか」

途切れる意識の合間に聞いた声。安心したようなその声に、しかしどこか残念そうな含みを感じたのは、俺の気のせいだろうか。

「すみませんね、迷惑かけて」
「……ああ、いや、まあ、な」

しーん、と沈黙。気まずい。それ以上に恥ずかしい。
ベッドに横たえ毛布で丸くなりながら、顔は壁へと向けていた。
当たり前だ。こんなんで、顔を見られるわけがない。サキュバスの
本能が全面に押しだされたのは、それはもうどうしようもない。う
ん、俺のせいではない。満月のせいだ。だけど、そうとわかってい
ても、恥ずかしいものは恥ずかしい。

「ていうか、あんたなら自力で解いてくださいよ。『魅了の瞳』く
らい」

「アホ言え。俺はそれでも健全な高校男子だ」

意味がわからない。健全な高校男子に解けない理由があるのか。
いい加減、拗ねていても仕方がない。上半身だけ身体を起こし、
隣に佇む光輝を見る。

「……どうだ？」
「だ、大丈夫ですね」

顔にこうまで力を入れたのは初めてだ。無表情を貫き通す。顔が
赤いのは、熱があるからだ。
さきほど投げられた球は『魔具ボルシネ』と呼ばれる消費アイテ
ムらしい。魔王が魔界からかつばらってきたもので、今では光輝の

所有財産。効果は一時的な魔力増大。満月によって乱れた魔力も、それ以上の魔力量でカバーすれば問題ない。ちょうどお嬢のように、ただ、一度に溢れ出した魔力のせいで、一瞬気を失ってはしまったが。

「まだあと一ダースはあるからな。当分の間は大丈夫だろ」

「……なんですか、それ。それじゃあ、俺、大人になれないじゃないですか」

魔具・ポルシネのおかげというか、せいというか、判別の儀は途中で中断された。今は胸も小さくなって（断じて元が小さいというわけではない）、背も少し縮んだ。髪はそのままだが、それは切ればいいだけのこと。それでも、若干、大人びた気もするし、結局人間で言えば、13歳から15歳へと年をとった程度の変化はあった。ただ、悲しいことに男のアソコも小さくなった。いいんだ、別に。男の性に未練はない。ないったら、ない。

「学校にはもう男として入学させたんだ。今更訂正なんてややこしいことできるか」

け、と悪態を吐く光輝。けれど、視線はどこか泳いでいる。珍しくらしくないその態度に首を傾げていると、お嬢がおかゆをその手に持ちながら、入ってきた。

「シロ！ 余の特性卵粥だ！ 心して食え！」

「あ、今お腹一杯なんで」

「昼も抜いているはずなのに！？」

ショックで立ち尽くすお嬢を前に、ふと昔もこんなふうに看病されたことを思い出す。

まだ自分の魔力もろくに扱えず、苦しんでいた頃。満月の日は、いつもそうだった。満月でなくとも。そう、いつも、苦しいときは、そういえば傍にいてくれた。唯一の特技と言ってもいい料理の腕を振るって、お粥を作ってくれたっけ。

なんだか、おかしくなつて、笑みがこぼれた。

「嘘だよ。お腹ぺこぺこ」

その言葉に、お嬢は花が開いたように満面の笑顔。しっぽがあつたら振っているだろう、そんな様子でこちらに近寄ってくる。

「ほら、余が食べさせてやる！ あーん」

「あ、光輝。スプーン取ってきてくれませんか」

「完全無視！？」

変っていくけど、変わらないものもある。

そうじゃないかと、なぜか思った。

それからお嬢は「シロは余のことをえっちゃんと呼んだ！」とか、世迷いごとを言っていたけど、熱にうなされていたときのことはよく覚えていない。まあ、覚えていなくとも、俺がそんなことを言うはずもなく。

当然無視した。

第十二話 黒猫は見ていた（前書き）

各人物の外見的特徴などをのつけた小話。読み飛ばさないで読んでいただけると嬉しいです。

第十二話 黒猫は見ていた

猫使いが荒い。

僕の主人はその一言に尽きる。

乱れた次元。幾度なく開かれる「門」。流入する魔の気配。

元魔界出身の主人からすれば、自分を捕らえに来たのではないかと気が気ではないみたいだが、僕からすればそれもとんだ見当違いだ。

魔界も100年以上昔の、しかも一介の魔女程度にそう気を使わないだろう。相当悪いことをして魔界を追放されたというのが本人談だが、単に家出てきただけではいかというのが、僕の見解だ。あながち間違いでもないと思う。おさげに眼鏡、膝を越えるスカートの丈こそが真面目な学徒の姿だと認識する我が主人。

いや、そういえば最近では眼鏡を外していたな。スカートの丈も少し切っていた。

ちよい悪を目指すと言う主人はどこかずれている。

まあ、そんな主人の使い魔になったのが運の尽きか。

そんな自分の不運を諦めて、観測を続ける。僕の主人の命は、魔界より来たる悪魔たちを監視せよ、だ。だけど、その観測している連中だが、そのうちの三人は主人と同じ学校に通っていることを、主人は知らない。言ったら言ったで半狂乱になるのはわかっていし、まあ、どう考えてもあの三人は主人の害にはならないだろう。

家の塀に丸くなって、とある豪邸の中を覗く。僕の使い魔として

の能力は、遠隔視及び透視と盗聴。つまりは、戦闘タイプではないということだ。情報集めが僕の仕事。あと一つ、秘密の能力もあるのだが、それは主人でさえも知らない。なぜ報告をしないのかって、ミステリアスなオスは格好いい、とユメちゃん（僕の恋猫候補）が言っていたからだ。そう、僕はミステリアスな猫。

そういうわけで、魔界より来たうちの三人を観測中。夕日が町を茜色に照らす時刻で、学校を終えた三人は各自部屋に戻っている。

とりあえず、一人ずつ覗いていこう。目に魔力を込めると、世界が僕の傍を通り過ぎていくように視界が開ける。この感覚は、あまり好きではないのだけど。

覗いた一人目は、最初にこの世界に来た悪魔、と言っていいだろうか。正しくはないが、間違いではない。実際は、戻ってきた悪魔と言ったほうが正しいかもしれないけどね。

名前は緒方光輝。一応人間らしいが、その言動、態度、波動を含め、悪魔に違いないと僕は確信する。その容姿は特に上げることもない。標準的な長さの黒髪と、少し釣り上がった黒目。背は標準より少し高いぐらいか。ただ、細目に見えるその体軀も、実際は引き締まった筋肉ゆえにそう見えるだけだということを、僕は知っている。過去の経歴を考えれば、それも納得できるのだけど。

その緒方光輝は、今現在、自室で何をしているのか。見なきゃよかったと、後悔した。

僕の主人の部屋が五つは入りそうなほど大きい部屋は、あちらこちらに剣やら刀やら斧やら槍やら棍棒やら鎌やら弓やら銃やらが、吊るされている。どれもこれも赤黒い染みがついているのは、気のせいだと思いたい。

その中で部屋の持ち主は一つの刀　三日月刀と呼ばれる武器を

手に取り、しゃ、しゃ、と研いでいる。刃を、研いでいる。くくく、と押し殺したような笑みが、聞こえた気がした。

気を取り直していこう。これ以上の最悪は訪れない。

次に覗いた部屋にいたのは、この世界に二番目に訪れた悪魔、と言っていてだろうか。これについては、僕は甚だ疑問だ。この人は本当に悪魔なのか。普段の行動から、どう考えても可哀相な人にしか思えない。それなのに、魔王と呼ばれる悪魔の王様がこの人だといふのだから、魔界の政治体制とやらに一抹の不安を感じてしまう。だけど、容姿は綺麗な人だった。

肩に触れる程度に伸びた金髪。それは絹のような髪、と呼ぶに相応しく。僕の主人のごわごわした髪とは大違い。空をそのまま映したような淡い青の瞳は大きく、睫毛長い。目鼻立ちもすつきり通って美人と言えよう。ただ、その顔は常に浮かぶその花開くような笑顔のためか、凜々しいとは言い難く、むしろどこか幼く見える。でも、こういうアンバランスさが男の人にはもてそうだ。スタイルも抜群で、ぼん、きゅ、ぼん、を地で行ってしまうのだから、僕の主人を酷く哀れに思う。あの真っ平らな胸に少し分けてくれないかとお願したい。

そんな、ある意味では魔王と言えるかもしれない魔王 エロー
ラ ロベスは、自室で何をしているのか。

覗いてみると、やけに少女趣味の部屋 ピンクの上にぬいぐるみやらレースやらがふんだんに使用された部屋で、どうやらテレビを見ているようだった。何を見ているのか、とテレビの方に意識を映すと、どうやら昼に撮っておいたドラマらしい。

『この泥棒猫!』

なんて古い。

しかし、この人は何を考えているのか、セリフを逐一メモしている。目が酷く真剣だ。赤く充血している。どの場面で使うつもりなのか、とても興味あるのだが、そろそろ監視対象を変えなくては。

観測結果。色々もつたいない人だと思った。

監視の最後は、こちらの世界に来たのも最後の悪魔。まあ、これについてはそう疑問も感じない。一度、魔物化したのも拝見したしね。

この人の名前は三つある。とりあえず、この家で使われている名前はシロ。本人は最初すごく嫌そうな顔をしていたけど、今ではもう諦めているみたい。で、本名はオルカッドリット。これは真名と呼ばれる大事な名前。それを僕が知っているのは、もちろん緒方光輝とエローラッドベスの話を盗み聞きしたからだ。そうそう屋外で真名は告げるものではない。そして、三つ目の名はオルカッドリット。これは学校で使用している偽名。男として学校では通っているみたい。

この人は淫魔と呼ばれる悪魔。幼少は両性具有で過ごす珍しい種族。本来ならそう強い魔力も持たないはずなのに、この人の魔力はなぜか異常なほどに強い。そのためか、判別の儀が完了できず、性別が決定しないまま姿は中学生ぐらいだった。過去形なのは、先日
の事件で少し容姿が成長したため。

腰まで伸びた銀色の髪は再び肩までの長さに切られていた。瞳は銀色。いつも眠そうに目を細め、やる気はなさそうに振舞っている。幼さは残るものの、そのあまり動かない表情のためか、魔王とは逆に大人びて見えた。中性的なその顔立ちは、現在、若干丸み帯びて女顔へと移行中。背は伸びたとはいえ、三人の中ではまだ一番小さいようだ。

この人は雨の中で一度出会った。僕の微弱な魔力に気付いたのは驚いたけど、そう深くは考えなかったらしい。多分、今では覚えてもないだろう。

部屋で何をしているのかと、覗こうとしたけれど、中断。

理由は胸に巻かれたサラシを外そうと苦戦中だったから。多少大きくなった胸を隠すため、結構学校でも苦しいらしい。ただ、紳士の僕としては着替え中のレディを覗くような真似はしたくない。人間型の身体に興味はないけどね。

さてと、これでここの監視は終わりだ。別段異常なく、平和……だったんじゃない？

とにかく、問題はないだろうと、欠伸とともに身体を伸ばし、塀から家の屋根へと飛び移る。家々の屋根から屋根へと飛び越えながら、気分は憂鬱だった。太陽は沈みかけ、薄っすらと夜の気配が近づいてくる。

ここまでなら楽な仕事なんだけど。

問題は、残りの一人だ。

第十三話 朧月夜の逢瀬

それは下弦の月が薄い雲の合間から覗く夜。朧月夜のことだった。

「おい、柿ピーがないぞ」

不機嫌そうな光輝の声に、お嬢と俺は見ていたクイズ番組から意識を後方へと移す。振り返ってその姿を視認。腕を組み、眉間に皺を寄せながら猛禽類のごとく獰猛な瞳を携え佇むその姿は、まるでそう、阿修羅のよう。認めたくない現実から目を逸らすように、俺とお嬢は再び視線をテレビへ向ける。

最近のクイズ番組は正解如何よりも、どれだけ馬鹿な答えが出せるかが問題のようだ。さきほどお嬢も出ればいいのと言ったところ、お嬢は何を勘違いしたのか喜んだ。まあ、あえて訂正はしない馬鹿やな、とテレビから漏れる音声。それに渴いた笑いを浮かべる俺とお嬢。しかし、そんな現実逃避を許すほど心優しい人間はここにいなかった。

「買出しはどうした、魔王」

「よ、余は今日、真帆ちゃんとカラオケに行っていたんだ」

らん、らーらー、と微妙に音を外しながら歌真似をする。煽ってどうすると叫びたい、が、とぼつちりはごめんだ。背後から感じる邪気を意識の上に置かないことに全神経を使う。

座ったソファーから隣のお嬢の姿が消えた。テレビに固定された首は後ろを振り向くな、と全力で警告する。見たらだめだ。見たら

終わりだ。くぐもった悲鳴が聞こえる。きゃん、あ、や、ちょ、や、やめてえ。と妙に艶っぱいお嬢の声に、自然と額から汗が流れる。

「なんだ、シロ。買出しに行きたそうな顔をしているな」

「はいもちろんです」

肩に乗せられた手に異様な圧力を感じた。

喉からは自分のものと思えないほど掠れた声が。

メモ用紙と貨幣を受け取り、逃げるように家を出てコンビニへと向かう。歩いて五分でつけるのだ。素直に従ったほうが賢いことは容易にわかる。

そして、衣服が乱れ身体から湯気を出すお嬢は視界から外しておいた。知ってはいけないことだって、きっと世の中にはある。

『で、カキピーとはどのような毒物ですか』

『てめえは俺を何だと思っている』

おら、とメモ用紙に乱雑に描かれたパッケージの絵。適当な絵だが、見れば一応その品物はわかるだろう。

こっちの世界における買い物は、お嬢と一緒に買出しに行くうちに自然と覚えた。学校というものにも行っているし、常識も生きていく上で困らない程度には身につけたはず。

結構こっちの世界に順応してきているかもしれない。

そんなことを考えているうちにもうコンビニに着いていた。ま、

歩いて五分だから。

コンビニは相変わらず目を焼くほどに明るい光が店全体を包んでいる。電気とは便利だ、とここに来るとよく思う。夜なのに、ここはまるで昼のよう。家の中よりも、周囲が暗い外でこそ、それはより実感できた。俺たちの世界では闇は闇と認識し、それに抗おうとは思わない。夜は暗い。それが当たり前なのだから。

それは魔物と人の差か、世界と世界の認識の差か。

うーん、と妙な機械音とともにドアが開く。店の中に入って物色し、菓子のコーナーでカキピーとやらを見つけると、店員のところへ持つて行った。俺以外に客もいなかったので暇だったのか、店員は雑誌を読みふけている。そういえば、俺が入ったときも挨拶すらしなかった。

勤務態度にどうこう難癖をつける気はないが、とにかく早く勘定して欲しい。こっちは命がかかっているのだ。

人の気配に気付いたのか、ようやく店員は雑誌から顔を上げた。そこで俺と視線が合う。

「あ、いらつしゃいま……せ？ あれ？ 君は」

視線の絡む相手の顔立ち。茶色の柔らかそうな髪だったがところどころ跳ねていて、垂れた目はどこか人当たりの良そうな顔を作り、座っただけでもかいとわかるその体躯。耳には金属製の装飾品。

はて、どこかで会ったことがあるような。

「……えつと、うーん？」

店員は座っていた椅子から立ち上がり、俺の顔をつぶさに観察。じろじろと、おまけに胸まで見やがった。セクシャルハラスメントという新たに学んだ言葉が頭を過ぎる。

妙なコンビニ店員の態度に、人を呼ぶか焼却するか迷ったとき、コンビニ店員は閃いたように手を打ち付けた。

「ああ。あの雨のときの」

雨。雨。雨。

あ、そういえば。

同じように、ぼん、と手を打ち付ける。

「あの変人野朗か」

「すごい認識」

ショックやわー、と大げさに手を上げる店員。

「でも、何か感じ変わったね。気付かなかったよ」

「成長期だし」

学校でもこの変化はこう告げている。無理があるだろう、とも思ったが、何気に通じるのですごい。というより、その他に納得しようにもないという現実と、光輝という名の独裁者による公言がそれを可能にしているのだらうけど。

「なるほどねー」

とまた胸を見られた。そんなに顕著な変化はないはずだが。とりあえず、みぞおちを決る。

呻きながらも、その柔な笑顔は消えない。ある意味素晴らしい精神力だ。

「この辺りに住んでいるの？」

「そうだけど」

通う学校名を告げると納得された。

「俺もそこに通っているの。あれ、でも君みたいな子いたかな？」

「先月転入したんだけど、俺もあんたみたいな人は見てないよ」

最初の数日は実は廊下を歩くときなど少しだけ目で探していた。
結局、見つけられずに面倒になって諦めたが。

「君、何年生？」

「一応、二年」

「じゃあ、会わないね。俺三年だもん」

先輩だよー、敬語使えよー、と目の前で手を振られ、目障りな
で叩き落とす。

「そうですね、先輩。早く会計してくださいよ、先輩。遠くに消え
てくれないかな、先輩」

「あれ？ 壁を感じるぞ」

それでも仕事はするのか、カキピーに機械を押し当てた。ぴ、と
値段が出る。お金を払おうとすると手を出されたので、台の上に置
いた。

「いけずだね」

口を尖らせ、貨幣を取り上げ、お釣りの小銭を差し出す店員。そ
れを受け取り、さっさと店を出ることを決意。

「あ、ちょっと待ってよ」
「待たん」

異様に明るいこの光は目に毒だ。例え人型でも、普通の人間より過敏に光を捉えてしまう。痛いとはまでは言わないが、正直少しきつい。

さつさとコンビニを出て、暗い夜道を歩き出した。とは言っても電灯が点々と道を照らしているのでそう暗くもないのだが。まあ、目には優しい。

遠ざかるコンビニに、早歩きとなっていた足の速度も緩める。人の気配もないので追ってきていることもないだろう。ほっと息を吐いて、気を抜いたその瞬間。

「ねえってば」

肩に置かれる手。条件反射的に前へと飛ぶ。硬いアスファルトの上を一回転して距離を取り、気配なく後ろへと立った相手を睨んだ。

「だから、驚きすぎだって」

この前と違って、知っている人間だった。つーか、さつき見た。

「あんた、仕事は」

「うーん、ま、いいっしょ。人来ないし、あのコンビニ」

誰だ。この男を採用した人間は。

軽薄な笑顔を浮かべ、ふらふら手を振る。夜道の一人歩きは危ないよー、とほざきおった。誰に向かって言っているのかわかってい

るのか。

「大丈夫ですよ、俺は。これでもあんたより強いんで」

「そう？ ま、いいじゃん。送っていつてあげるよ。ほら、こっちでしょ」

勝手に人の買い物袋を取り上げ歩き出す。強引な態度に、しかし返す言葉も面倒になって、止めた。こっちの世界の人間はどいつもこいつもこんなしかないのだろうか。腹立たしいというよりも、呆れる。なんて世界。

「そういえば、名前聞いてなかったね」

「……………シロでいいですよ」

「その間に葛藤を感じたよ」

愛称か。ま、始めはそんなもんだよねー。と笑う男。しかし、お前と俺の間には始めも間も存在し得ないのだと叫びたい。ただひたすらに望むのは終わりだけ。どうして一度しか会ったことのない人間に、こつも馴れ馴れしく接することができるのだろう。不思議でならない。

そのまま無言。歩く速度は俺に合わせているのかゆっくりだった。静かだ。木々の葉が擦る音すら聞こえるほどに。

まだ無言。

どこまでも無言。

まったく無言。

「……………名前は」

「え？ 聞きたいの？」

わざとらしく驚いたその顔がむかつく。いいから言えと、その足

を蹴った。

「天宮。天宮慎吾。天宮先輩でいいよん」

「わかりました、変態」

「そこまで!？」

悲しそくに頭を下げる天宮先輩。ふと気がつく、もう家の傍だ。さすがに家を知られるのは勘弁なので、そこで荷物を奪う。

「あ、もう家の傍なんで。どうぞ、ごー。帰ってください」

「もっと甘い時間はないの？」

「屋根裏部屋の片隅にも」

きっぱり言う。

さらに頭を下げた天宮先輩とやはら頂垂れたまま、じゃあね、と来た道をとぼとぼと帰っていった。落とした肩には哀愁が漂う。ちよつと意外だった。帰るときはあっさりしているんだ。もっとねばるかとも思っただけ。

ちよつとだけ、ほんの小指の甘皮一枚分程度に後悔した。少しつっけんどんにし過ぎたかもしれない。純粋な親切心からだったのかも。

ま、いつか。と結局自分で納得し、少し早歩きで家へと足を進める。人間はようわからん。

しかしその歩みも、ふと思い立ち、また足を止めた。振り返れば、もう天宮先輩の姿は見えない。暗闇の奥先にも、もういない。

どうして、家の方向がわかったのだろう。

浮かぶ疑問に、二度も取られた背後を思う。しかし、今考えて答えが出るはずもなく。

とりあえず、帰宅を優先させることにした。
鬼が家で待っている。

第十四話 トラウマと呼ぼう

「はい。それではロングホームルームLHRを始めます。今日のお題は、来週の遠足への行き先ですねー」

高校生と混じっても遜色ない瑞々しい若さを携えて、雛ちゃんこと雛森先生はにこやかに黒板へ『遠足先を決めよう！』と書き付ける。がやがやと騒がしいクラスに対して、今日は注意することもなく、泣き出すように顔を歪めることもなく、ただその笑顔は眩しいほどに華やかだ。

「それではー、委員長さんと副委員長さんに前へ出てきてくださーい。生徒の自主的な活動が大事何ですよー、こういうのは。じゃ、先生は高校の同窓会があるんで、これで」

荻原くん来ているかなー、とスキップするようにドアへと向かって、教室を出て行こうとする雛森先生。それに何の気もなく見てみると、ふと隣から声が。

「職務怠慢」

ぼそ、と。しかし、それはクラス内で騒がしく飛び交う声の隙間を縫うように。ぴし、と雛森先生は止まる。クラスは時を止めたかのように押し黙った。

それは、暗黙の了解。

なぜかどす黒い冷気を感じる隣　緒方光輝はその顔に似合わない
晴れ晴れとした笑顔を貼り付けて、もう一度言った。
職務怠慢、と。

「え。だ、だつて。先生いてもやることないし……」

「生徒の自主的な活動を見届けるのも、先生の役目では。生徒の話
し合いだけでは話が逸れてしまう可能性もありますし。ときに方向
修正をしないと、スムーズに議論が進まない。それはやはり、先生
が担うべき職務のはずです」

な、みんな。と振り仰ぐその笑顔。

そうですね、と棒読みながら満場で声を上げる。

これは意見を求めているのではない。意見に従うことを求めている
のだ。

「あ、あう。う、ううう」

荻原くん、と妙に切ない言葉が聞こえた。雛ちゃん、と同情する
声が僅かながら囁かれる。

「先生、席に着いてください。議論が進みません」

は・や・く、と懇切丁寧に区切って告げる悪魔の声。なぜか妙に
嬉しそうだった。出生に関して疑問に思うこと幾度なく。人間は悪
魔よりも性根が腐っていると、この世界に来て学んだことだ。怖く
て口には出せないけど。

小学校がいいな、可愛くて素直な子供とふれあいたいな。そんな
眩きを隠すことなく、よろよろと元いた場所へと雛森先生は帰還。
相当微妙な空気になりながら、光輝は満足したように頷く。

「別に、帰してあげてもよかったんじゃないですか」

「いやだね。俺だって、こうも退屈な議論に参加させられているんだ。一人だけ得させるか」

大体、間違ったことは言ってねえしなあ。と、今度はその顔に似つかわしい悪魔の笑み。確かにそうかもしれないが、そこに悪意を感じ取ったのは俺だけではないはずだ。

しかしやはり慣れているのか。クラスは、今のはなかったことに、という流れのもと、委員長と副委員長が黒板の前へと出る。眼鏡をかけた小柄な少年と、おさがが特徴な少し地味な女の子だ。前にもそういえば見た気もする。

その二人のもと、てきばきと議論は進んだ。ぶつちやけ、先生はいらなかった。光輝はその間熟睡していた。それを咎める勇者は、生憎この地球にはいない。お嬢は議論の後、雛森先生にアンパンをプレゼントしていた。ごめんな、と悲しげに俯くお嬢の姿に、感激していた雛森先生。末期だな、と寂しい笑顔で俺は傍観。

そんなこんなでLHRも終わり。
放課後。

「山か。余は海で潮干狩りがしたかったな」

残念そうに呟くお嬢。今日は珍しく、三人で登下校。いつもはばらばらなのだが、特に三人とも用事がなかったうえに、家が同じでもある、自然とこうなる。

遠足は山か海かで分かれたが、結局山の散策に決定した。

「今の時期、海はまだ寒いだろ。夏のことによっておけ」

欠伸交じり光輝は言う。結局、議論の間、光輝が起きることはなかった。起こす人もいなかった。触らぬ光輝に祟りなし。

「というか、遠足って何です？ 一体何の目的をもって何の理由で何の結果を求めてそんなことするんです？ 不思議でならない」

「お前は遠足に恨みでもあるのか」

「ないはずだぞー。昔、余と一緒に行ったことあるもん！ 楽しかったもん！」

な！ と一切の疑いもなく同意を求めるお嬢に、ああ、と適当に頷く。

頷いて、思い出し、顔から熱が引いた。どこか遠くを見つめる。

「……遠足は、嫌いです」

「……そうか」

「なんで!？」

珍しく同情したような光輝の顔と、心底不思議そうなお嬢の顔。なんで、とはこちら聞きたいところだ。

あ、蜂！ と友達なのかと聞きたくなるようなはしゃいだ声でキラビーの巣を突き、追いかけられながら山を駆け巡り、血溜まりの沼に落ちて溺れかけ、グリーズリーに出会いがしらキックを交わし、これが森の挨拶だ！ と笑うお嬢とともに再び山を駆け巡り、トラップはものの見事に嵌りに嵌って、食人花は魔物も食べるのかな、と不思議そうにこちらを見るお嬢に恐怖した、そんな幾度なく駆け

ずり回った山の中。

気付けば道もわからず一週間遭難していた。そんな苦いを通り越してむしろ甘いメモリー。

「遠足なんて、遠足なんて……」

「無理するな。思い出さなくていい過去だつて、あるはずだ」

ぼん、と肩を叩かれる。妙に優しい光輝を不思議に思い、顔を向けると、案の定そこに映る表情に優しさはなく。

「もちろん、当日欠席は俺様が許さんが」

愉悦に満ちたその表情。

大体そうそう恐い思いをする遠足はねえ、と光輝は鼻で笑うが、わかっていない。光輝はこのお嬢と遠足へ行く恐怖を知らない。

「おやつは500円までかー」

うまい棒は欠かせないな！ と、来週の遠足にすでに張り切っているお嬢。とりあえず面倒なことは起きずに、平和で穏やかに終わりますように、と心から祈る。祈る対象はわからなかったが、それでも祈らずにはられない。

人間の信仰というものがどういうときに生まれるのか、なんとなくわかった気がした。

第十五話 遠足Ⅱ サバイバル

「だから遠足は嫌だって言ったのにー！」

「うつせえー！ 喋っている暇があったら走れ！」

「し、シロ。光輝。まずいぞ、追いつかれる！」

楽しい時間は矢のごとく。しかし、嫌なイベントを待ち受けるその時間も同じように早いわけで。

遠足日。やはり嫌な予感というものはなぜかもの見事に的中してしまうもので、案の定こうやって走り回るはめになるわけで。

遠足、という言葉は死のサバイバルという定義に違いない。

息を切らしながら木々をかきわけ、そう確信した。

それは天気も麗らかな、穏やかな昼のこと。

「あーるーこー。あーるーこー。私はー元気ー」

「元気じゃねえよ」

へつくしゅ、と光輝の止まらないクシャミ。はい、とポケットティッシュを渡すと、うい、と大人しく光輝は受け取る。お嬢に対してジャーマンスープレックスもアイアンクローもコブラツイストもないとは。どうやら相当重傷らしい。

「なさけないぞー、光輝。花粉症ぐらい、光輝の力で吹っ飛ばせー！」

「真帆。ティッシュはもうないか」

「ない。というか、渡さない。私もこれ重要な資源なの」

べつくしゅん、と女の子にしては豪快なクシャミ。お嬢の言葉を無視した光輝も、そうか、と頂垂れるように頷くだけ。

あ、あの光輝が強奪しない!?

それは苦しみを共有する仲間ゆえにか。驚嘆の顔で光輝を見ると、光輝は「あん?」と不機嫌そうにこちらを睨む。だがその眼光に力はなく。

「相当弱っていますね」

「うつせー。お前も花粉症になればわかる」

うんうん、と隣を歩く真帆も同意を示す。先を歩くお嬢は、無視されたことも気にせず元気よく歌う。今日のお嬢のテンションの高さは正直うざい。いや、むしろ恐い。たんたららんらーとか、また微妙にずれた鼻歌で、手に持った枝で道を薙ぎながら進んでいる。遠足の日。四人の班を作るということで、俺は光輝とお嬢、それにお嬢の友達であるおさげが特徴の副委員長　駒沢真帆を入れて行動していた。四つのルートから頂上を目指すというこの散策。特に盛り上がりもなく終わると思われたこの遠足にも、思わぬ落とし穴があったらしい。

「くそっ!　誰だ山がいいとか言いやがった奴は。海がいいに決まっているじゃねえか、馬鹿。後で後悔させてやる。生きてきたことを後悔させてやる」

「ふふふふ。燃えればいいのに。杉とかもうこの山全部燃えればいいのに」

ぐす、びーん、と二人仲良く鼻をかむ光輝と真帆。真帆のことは

よく知らなかったが、とりあえずお近づきにはなりたくない性格だとわかった。ぶつぶつと怨嗟を撒き散らす二人から可能な限り離れるため、仕方なくお嬢に近づく。

「どうしたー、シロ？ 寂しくなったか」

にやはは、と笑うお嬢にケツキックをかまし、散策開始の際に先生から貰った地図を見る。

「今どれくらい進んだ？」

「え、ちよつと。キックはスルー？」

「半分くらいは行ったと思うけど」

ちょうど遠くに看板を見つけた。残りの距離を見ると、やはり後半分くらいか。早くこの行事を終わらせないと、後が恐い。今は静かでもいいが、光輝が復活したときの怒りパワーがこっちに襲い掛からないとも限らない。まあ、そうになったらそうなたでお嬢を生贄に捧げるつもりではいるが。

「はあ。やっぱり遠足は嫌いだ」

気苦労が多い。つーか、面倒臭い。

しばらく淡々と山の中で足を進める。しかしふと、いつの間にか隣にお嬢がないことに気付いた。さっきまで騒いでいたのに。

振り返れば、少し距離を置いて、後方には光輝と真帆が続いている。けど、そこにお嬢の姿はない。

「し、シロ！」

慌てたような、でもどこか嬉しそうな声。声の出何所は茂みの奥。

ちよろちよろ、小動物のようだ、と思った。そういえば、昔飼っていたワイルドドッグはこんな感じだった。目を離すといなくなる。何やってんだか、とため息をついて、茂みを越えた。

「お嬢。何やってんだよ。ほら、先行くよ」

「み、見て。こ、こ、これ！」

お嬢の指差す先。変な花でも見つけたかと、呆れた顔でそれでも見てみる。

息が止まった。

「熊だ！」

お嬢が大きな声で叫ぶ。初めて見た、グリズリーみたいだな！と大喜びのお嬢。その見事な二足歩行で佇む大柄な身体。黒の毛色に紅の瞳。涎を垂らす牙。獲物を引き裂く獰猛な爪。

「つーか、グリズリーじゃん」

呟き、お嬢を見る。お嬢はその手に持つ枝でグリズリーを刺していた。つんつん、と。

「元気か？」

「正気か！？」

ミドルブローをお嬢に叩き込む。ぐえ、とか叫んでお嬢はその枝を地面に落としたが、時すでに遅し。グリズリーはこちらに目標を

見据えていた。

呻くお嬢を肩で担ぎ、茂みを飛び越える。後方からは怒りに満ちた獣の慟哭が響いた。やばい。まずい。死ぬ。

「ちょっと、オルカくん。今の声は……って、まおう！？ どうしたの！？」

「おい、シロ。今の声は何だ」

「説明している暇は」

そこで、ぴし、と固まった光輝と真帆。見据えるその目の先が恐い。それでも恐る恐る振り返れば、やっぱりそこには熊さんのおいでになっていたとき。

「く、くまー！？」

二人は叫び、大急ぎで山を下る。もちろん、俺も足をフル回転にして追いかけた。

走り、走り、走って。

後ろの気配はやっぱり消えない。さっきよりも近づいている気がする。これ、いつか追いつかれるぞ。

「ちょっと、どういうこと！ オルカくん！？」

「お嬢が枝で突いたんだよ！」

「まおうー！」

「後で仕置きでてめえー！」

うつ、とまだダメージの抜けないお嬢は俺の肩で呻く。落とそうかとも思ったが、さすがにマジでやばそうなので、鉄の理性で我慢。後でラリアットを決めてやる。

こうして鬼ごっこは始まった。

第十五話 遠足〃サバイバル（後書き）

別の小説を書き始めました。近々投稿の予定。学校も始まるので、更新遅れるかも。週一回ぐらいを目安にします。

第十六話 正義の味方は来るのが遅い

「私に案があるわ」

全力フルマラソン。脱落〃死の世界。背後からは獲物を欲する獣の雄叫び。

そんな中、我がクラスの副学級委員長、駒沢真帆はそう言った。おさをたなびかせ、自信満々に頷く。

「誰か一人が囷になるの」

「よしシロ、魔王を投げろ！」

「ラジャー！」

「う、うええ！」

「ちょっと！」

違うっつーの！ と頭を叩かれる。おまけに光輝の頭も叩いていた。おお、勇者がここに。光輝に身体を張ったツツコミを入れる人間を見たのは、初めてだ。しかし、その尊敬の眼差しも呆れ顔で返される。

「オルカくんって、そういう性格していたのね。顔はいいのに」

「おい、そんなこと話している場合じゃねえだろ」

光輝がくい、と背後を親指で指す。わかっているわよ、と真帆はため息。

「私が行くわ。それでも陸上部ですもの」

足には自信があるの、と決意に満ちたその表情。しかし、いくら

足に自信があるうと、相手は魔物。いつか追いつかれることは目に見えている。スタミナが違うのだ。見る限り、スピードは現段階でそう大差はないが。

俺と光輝は顔を見合わせ、お互いの気持ちと同じであることに気付く。

「そうか、頑張れ」

「ありがとう、真帆さん」

「あんたたち、少しくらい止める素振りをしなさいよ！」

碌な男がいねえー！ と真帆の嘆きが山に木霊する。生憎、今の俺の男指数は衰退中だ。光輝に限っては男依然に人としての問題だ。それでもその役目を引き受けてくれるのか、真帆は身体の向きをずらし、脇道に逸れようとしていた。

「ちょ、真帆！？　いくら足が速くても危険だぞ！」

命を粗末にするなんて馬鹿のすることだあ！ と叫ぶお嬢。その目は涙で潤んでいた。どうでもいいけど、お前そろそろ俺の肩から降りろよ。

今生の別れになるかもしれねえな、おやつさん！ とノリよく返す真帆。その顔に浮かぶのは感激の表情。まあ、俺たちの対応と比較すれば当然だ。けれど、なぜか少し罪悪感を滲んでいるようにも見えて。

しかし、それも一瞬。

「ま、まおう。う、ごめん！」

脱兎のごとく。真帆は道を逸れて走っていく。

光輝と俺はお互いに再び顔を見合わせ、ほっと一息。よかった。

助かった。

しかし止まぬ獣の慟哭。

途切れぬ気配。

嫌な予感はまだに憑いたように消えない。

嫌々視線を背後にやれば、またも森の熊さんと視線が合った。

「なんで!？」

「つーか、あいつ逃げた!？」

「ま、真帆!？」

考えてみれば、こいつが怒っているのはお嬢のせいで。それを追ってきているのだから、真帆を追うはずもないわけで。

あー、もうこいつ捨てようかな。

「だから遠足は嫌だって言ったのにー!」

「うつせえー! 喋っている暇があったら走れ!」

「し、シロ。光輝。まずいぞ、追いつかれる!」

お嬢の声に俺と光輝は前へと飛ぶ。

空中で一回転。

その合間にグリズリーが爪を振り上げ、下ろす姿を見た。あのままだらお嬢ごと引き裂かれていただろう。

そして俺たちはグリズリーと対峙する。侮辱への怒りと焦らされたストレスのためか、グリズリーの瞳はすでに狂気に浸っていた。それでも、乏しい理性で獲物がもう逃げられないことを悟ったのか、じりじりと間合いを詰めてくる。

「お前、仮にも魔王の側近だろ。下級の魔物ぐらいなんとかしろよ」
「無理ですね。今の人間型じゃあ、身体能力も低いし、何よりここは魔力が少なすぎる」

魔術を使えなければ知性もないが、その分グリズリーのような魔物は身体能力が格段に高められている。魔術が制限され、身体能力も人並みの現状では、正直このグリズリーでさえも倒すことは難しかった。

「というか、光輝。あんた、その側近をいとも容易く倒したじゃないですか。早くあつさりばつさり倒してくださいよ」

「生憎、今の俺の戦闘力はマイナス90パーセントだ」

へつくしゅ、と緊張感のなくしゃみ。ティッシュ、と差し出された手を力強く叩いた。

「やばいじゃないですか！」

「うつせえ！ まだ一人いるだろ！」

そして俺の肩にいるお嬢を見る。

お嬢は二人の視線に、ほえ？ と気の抜けた顔。

「やばいじゃないですか！」

「うつせえ！ 俺の知ったことか！」

こちらの漫才はお気に召さなかったのか、グリズリーは雄たけびと共に襲い掛かり、こちらへその爪を一薙ぎ。光輝は右へ飛び、俺もお嬢をぶん投げて、左へ回避。が、お嬢を投げた分だけ遅れた代償。わき腹に爪の先端が食い込み、少々肉を抉られた。

「……つくは」

背に衝撃。そのまま木へと叩きつけられたようだった。木を支え

に立つこともままならず、座り込む。制服は赤く黒ずんでいく。

「シロ！」

地面を転がり泥だらけのお嬢の叫び。失敗した。お嬢を担いだままだったなら、お嬢がやられていただらうけど、くそ。見捨てればよかったのに。最悪だ。めちゃくちゃ痛い。

「ちっ、仕方がねえ」

光輝は背に背負ったリュックに手を入れ、そこから一振りの三日月刀を出した。

木漏れ日を刃に乗せて、揺らぐ黒の波動。というか、そんなものを入れていたのか、あんた。

「シロ！ 魔物化にどれくらい掛かる？」

「……………三分。怪我の治療に時間を割いて、五分」

「上等だ！」

俺へと止めを刺すためか。確かな歩みを以って俺へと近づくグリズリーに、光輝はその三日月刀を振るう。まさか反撃されることを考えていなかったのか、遅れた回避が俺と同じようにわき腹を抉った。

轟く魔物の悲鳴。

「魔具デイルディア！」

切り裂いた魔物から吹き出る血。それはもう、止まることはない。魔具の中でも魔剣に属するデイルディア。能力は、永遠の殺傷。受けた傷は癒えることがない、悪魔の呪い。

けど、正直それは現状であまり役に立つ能力ではない。抜かれた血で疲労が出てくるのも、まだ先の話。短期決戦には向かない武器だ。

「くそ、他にも持つてくればよかった」

魔物が薙ぎ、それを光輝が皮一枚の差で避け、光輝が振るい、魔物がそれを爪で受ける。幾度なく繰り返す交差。人間にしてはこれ以上のない攻防だろう。魔物相手に、いくら魔具を持っていたとしても、善戦しているのだ。光輝は強かった。人間にしては。

しかし、光輝は弱かった。かつての『光輝』の面影もなく。

なんとなく、わかつていた。あの満月の日から。『魅了の瞳』で見据えたあの時から。

光輝に、もう昔の力はない。今あるのは、人間よりも多少は上の身体能力と、その戦闘力の差を埋める魔具だけ。花粉症のせいだという誤魔化しを信じるほど、生憎馬鹿じゃない。

現状。光輝に致命傷はないものの、徐々にしかし確実に、血に染まっている。多分、五分も持たない。

逃げればいいのに。別に、今の光輝でも、俺たちを見捨てて逃げることはできるだろうに。

だけど、光輝は逃げなかった。

人間でしかないその身体に、傷は増えていく。

「素は闇。黒の背徳。闇への仕手を這い紡げ。光を飲み込む悪魔の矢。『^{デモルト}夜の閃光』」

見える、幾筋の黒の光。それは闇の線。数本の闇がグリズリーを

貫く。

「…………お嬢？」

紡いだ魔術の囁きは、お嬢の声。でも、馬鹿だろ。その魔術は、その魔術は、この世界で行使できるような魔術じゃない。

お嬢。内在魔力を消費したな。

「今だ、光輝！」

「でかした！」

光輝は飛び掛る。貫かれた闇に呻くグリズリーへと。

でも俺は、その魔物の瞳の狂気に潜む、理性を見た。

もう怪我の治療に時間を割く暇はなかった。まだ、変化の途中。

けれど、それに構う余裕もない。変化の力を全て背中にし、動かぬ足の代わりに、蝙蝠型の翼を生やし、その身体を光輝へと走らす。

吹き飛ばすため、光輝に体当たり。光輝は短い呻きと共に横へ。

そして魔物は変わった標的も気にならず、爪を振り下ろす。

頭へ振り下ろされる爪を見て、あ、死んだかな、となぜか冷静に考えて。

「シロ！」

叫びは誰の声だったか。

.....
.....
.....ん？

未だに訪れない衝撃。ちょっと、恐いんですけど。
恐る恐る目を開ければ、なぜか目の前には緑豊かな山の中腹。グリズリーは下にいた。光輝とお嬢も、下にいて。あれ？ 俺宙に浮いている？

空へと飛んだ記憶はなく。そんな時間もなかったはずで。
そして混乱する頭に聞こえる、奇妙な叫び。

「正義の味方、マホリン登場！」

夢かな、と思った。

第十七話 黙ってあげるのも優しさ

現状把握。

俺が宙に浮いているのは、浮いた箒の柄に俺の制服が引っ掛かっているからだ。

なぜ箒が浮いているかは、それは箒に魔力を込めた者がいるからだ。

そして魔力を込めた者は、その箒を跨いでいる人間に他ならない。

「真帆だ！」

「真帆じゃない！」

お嬢の叫びに真帆は間髪入れず否定する。

黒の三角帽子に簡素な黒のドレス。特徴のおさげは解かれ、今は若干ウェーブのかかった黒髪が背にもつく長さ。帽子を深く被って目を隠してはいるが、それでも声で丸わかり。

そんな副学級委員長、駒沢真帆は、所謂魔女っ子スタイルで再び登場したのだった。

「私は宇宙銀河系正義の味方マホリンよ！ 銀河に散らばる悪の組織を片っ端に殴り込みに行く正義の味方！ 反論は一切受け付けない！」

「マホリン、ありがとう！ マホリン、感謝の言葉もない！ マホリン、似合っているぞ！」

「お黙り！」

光輝の嬉々満面の表情から繰り出される悪意の滲む言葉に、真帆は悔しそうに歯噛みする。帽子の合間から覗く頬は羞恥のためか赤

くなっていた。

さて。

いい加減苦しくなってきた箒を首から外し、今度は自分の翼で飛ぶ。変化はもう完全に終了していた。瞳は赤く染まり、頭には山羊の角。蝙蝠の翼が背中中の制服を突き破り生えている。背の制服と一緒に胸に巻いたサラシも破れてしまったので、両手で前の上着を抑えた。抑えとかないと、取れちゃうし。

「助かった。ありがとう、真帆さん」

「違うっているのに……」

くそ、もういいわよ。とやけくそ気味の一言。それから、べつくしゅん、と女の恥じらいがどこかに飛んだようなクシャミを一度してから、真帆は鼻を嚙り、こちらを見る。

「ていうか、あなたたちだったの。魔界から来た悪魔って。うまく化けたわね。まったくわからなかったもの」

報告しなさいよ、あの馬鹿猫。とイラついた呟き。

それが何のことかわからず首を傾げていると、地上では怒りに満ちた慟哭が響いた。

「……おしゃべりはまた後で。とりあえず、こっちを先に片すわよ」

届かない獲物に向かって爪を振り威嚇を続けるグリズリーに、真帆は箒で旋回する。グリズリーは蠅を払うようにその爪を何度か真帆に向けるが、真帆は箒でそれをすり抜けるようにかわしていた。それは風に舞い踊る木の葉のように。しかも、ただかわしているわ

けでもないようで。その間、真帆から魔力が静かに満ちていくのを感じた。

そして十分魔力が足りたのか。

真帆は力を込めた呪詛を謳う。

「ルートディッヒ、エートディッヒ、ヘレットダマル。微かなる綻びを」

最後の、沈め、という言葉を含図に、真帆から滝のように膨大な魔力が大地へ巡る。

魔力は駆け、グリズリーの立つ足場に集う。その大地は沼のように水気を帯びて溶け合い、グリズリーの足に絡みついた。その突然の出来事に、グリズリーは悲鳴染みた声で呻く。その前足で沈む後ろ足に絡む泥を払おうとするも、泥は払う傍からまた絡み付いていた。狂ったように取り除こうとするグリズリーのその行為は、皮肉にも前足にまで絡み付く結果となった。泥により動きを封じ込められたグリズリーは、そのまま半身を底なし沼に沈めていく。

「すごい」

土に属する魔術なのは見てわかるが、こつも強力なのをこの世界で行使できるとは。内在魔力を消費したのかと目を向けても、その存在が希薄になっている様子はない。

魔女。魔界でもそう聞かない種族だが、これは一体どんなトリックだろう。

「……馬鹿。こんなのそんなにもたないわよ。そろそろ解ける。早く、止めを」

息を乱す苦しそうな声。真帆を乗せる筈は降下し、地上へとその

足をつけていた。魔術に力を使いすぎたのか。

光輝は頷き、ちよいちよい、と俺を呼ぶ。

「十分だ。さあ、止めだ！ 行け、シロ！」

「いや、今はちょっと」

実際問題、手が離せない。胸が見える。

「光輝が行ってくださいよ」

「アホ。今の俺はお前のせいで鞭打ち状態だ」

転がったためにお嬢と同じ泥だらけの光輝。気力で立っていたのか、膝をつく。まあ、先ほどの魔物との攻防で神経をすり減らしていたのはわかる。わかるが、わざとらしく肩を抑えたりするのは如何なものか。

「せいって。助けてやっただんでしょうが！」

「加減しろ！」

「できるか！」

「早くしなさいよ！」

終わらぬ言い争いは、結局、お嬢が責任を取ること満場一致。

内在魔力を減らさない初級魔術をグリズリーの眉間に撃つて、事の収束を得たのだった。グリズリーも一応、生態学的には熊なわけで。

今日の雑学。熊は眉間が弱点だったりする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8644d/>

魔王の側近は今日も行く

2010年11月17日14時58分発行